

第10回

全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか



ひろば
10年
えん 明日の
つくろ

子どもきらきら
家族にここに
地域でほっこり

報告書



第10回全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか 報告書

平成23年11月

発行：第10回全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか実行委員会

第10回全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか実行委員会事務局
NPO法人ふらっとスペース金剛

〒584-0073 大阪府富田林市寺池台1-13-31 TEL.0721-29-5227 FAX.0721-55-2003
E-mail info@jissen-koryu-seminar-osaka2011.jp
専用ホームページ http://www.jissen-koryu-seminar-osaka2011.jp

平成23年

11月19日 土・20日 日

13:00~17:00

【18:00~20:00 交流会】

●会場 シティプラザ大阪

10:00~15:15

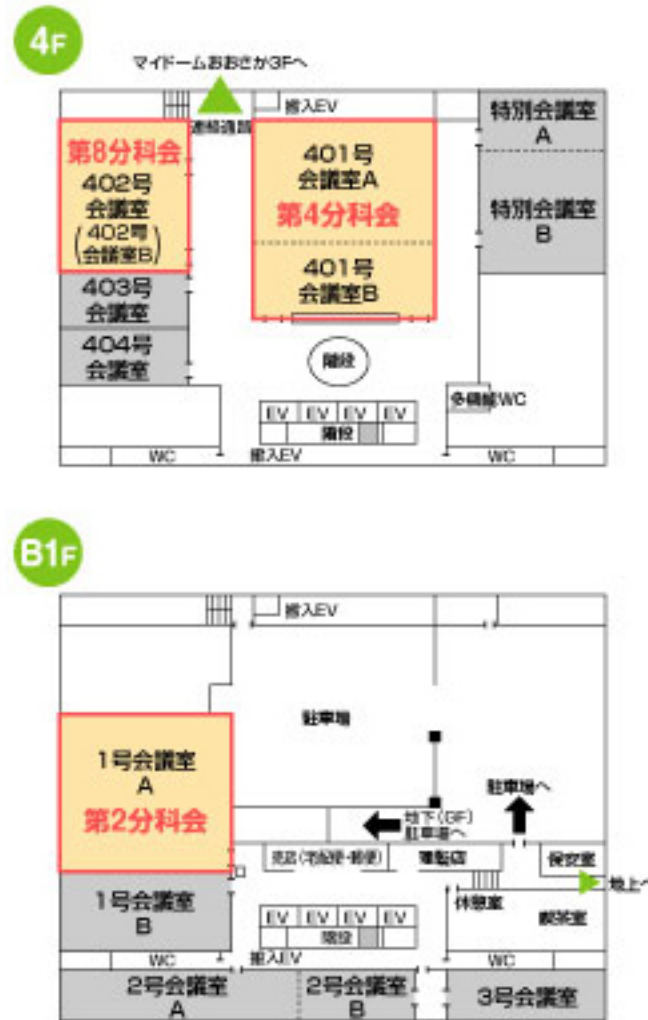
●会場 シティプラザ大阪
大阪商工会議所

●主催：大阪府 ●共催：大阪市・堺市 ●企画運営：第10回全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか実行委員会
●後援：厚生労働省・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会・大阪府社会福祉協議会

シティプラザ大阪 会場図



大阪商工会議所 会場図



- シティプラザ大阪1Fと大阪商工会議所1Fを結ぶ連絡通路があります。
- 20日は9:30より各分科会会場にて受付を開始します。
- 昼食は各分科会会場(第5分科会は指定した会場)でお取りください。

会場へのアクセス

- 地下鉄堺筋線・中央線 堺筋本町駅 12・1号出口より徒歩6分
- 地下鉄谷町線・中央線 谷町四丁目駅 4号出口より徒歩7分

ホテルシャトルバス
地下鉄御堂筋線 本町駅 9号出口よりイトウビル(ハードロックカフェ横)(御堂筋沿い)前から乗車



シティプラザ大阪
〒540-0029
大阪市中央区本町橋2-31
TEL.06-6947-7888
URL <http://www.cityplaza.or.jp>

大阪商工会議所
〒540-0029
大阪市中央区本町橋2-8
TEL.06-6944-6211(総務広報部総務担当)
URL <http://www.osaka.cci.or.jp>



第10回 全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさか

子どもきらきら
家族にここにこ
地域でほっこり

セミナー日程・プログラム・目次

11月19日(土)			
時間	全体会プログラム	会場	ページ
13:00~13:20	開会・挨拶 大阪府副知事 実行委員長		
13:20~15:00	【パネルディスカッション】 子どもきらきら・家族にここにこ・地域でほっこり ●コーディネーター 大阪市立大学 教授 ●パネリスト NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 ROMANTIC MOTHERS STYLE 会長 北九州市立大学 准教授 ●行政説明 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室 室長	シティプラザ 大阪・2階 【包】	4~7
15:00~15:15	休憩		
15:15~15:45	【大阪府親と子のおゆみはぐくむプロジェクトより】 多様な支援者による子育て支援の現在 種智院大学 助教		8
15:45~16:50	【ぶっちゃんげ討論】 子育て支援者における当事者性と専門性 種智院大学 助教 長野県短期大学 講師 NPO法人滝川子育て支援ネットワークティビー 理事長		9
16:50~17:00	事務連絡		
18:00~20:00	【オプション】交流会		28

11月20日(日)			
時間	分科会プログラム	会場	ページ
10:00～12:00	【第1分科会】地域子育て支援拠点事業 はじめの一步 ●コーディネーター 日本福祉大学 教授 高辺 雅一郎さん ●講師 NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山 千鶴子さん ●ファシリテーター (NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 研修部会より) NPO法人子ども達の環境を考える・ひろこせん 代表理事 赤迫康代さん 地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 福岡市城南区子どもプラザ 代表 井上 みゆきさん NPO法人子どもNPO和歌山県センター 理事長 岡本 瑞子さん NPO法人子育てを楽しむ会 理事長/京都きっすプロジェクト 代表 迫 きよみさん NPO法人子育て調剤室 理事長 柴田 恒美さん NPO法人やまがた育児サークルランド 代表 野口 比呂美さん NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長 演田 美世さん あまがさきキッズサポーターズわいわいステーション 代表 松崎 美穂子さん NPO法人子育て支援ネットワークとくしま 理事長 松田 妙子さん NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 安田 典子さん NPO法人くすくす 理事長	シティプラザ 大阪・2階 【包】	10～11
	【第2分科会】「ひろば」からはじめる虐待予防 ●コーディネーター 神戸大学 教授 伊藤 薫さん ●事例発表 社会福祉法人大阪水上隣保館子ども家庭支援センター ファミリーポートひらかた チーフ 山下 裕美さん NPO法人女性と子育て支援グループ・pokkapoka 代表理事 高辺 和香さん 横浜市港北区地域子育て支援拠点「どろっぶ」 施設長 原 美紀さん	大阪商工会議所 地下1階 1号会議室	12～13
	【第3分科会】父親も集う「ひろば」づくり ●コーディネーター 北九州市立大学 准教授 恒吉 紀寿さん ●事例発表 大阪市子ども青少年局子育て支援部管理課 課長 榎木 健さん NPO法人新座子育てネットワーク 佐野 育子さん	シティプラザ 大阪・4階 【包】	14～15
	【第4分科会】ソーシャルワークの視点でみる地域子育て支援 ●コーディネーター 関西学院大学 准教授 橋本 真紀さん ●助言者 大阪市立大学 教授 岩間 伸之さん ●事例発表 NPO法人子育てネットくすくす 理事長 草薨 めぐみさん 新座市立栄保育園 地域子育て支援センターるーえん センター長 柳澤 教子さん	大阪商工会議所 4階 401号会議室	16～17
	【第5分科会】地域をつくる「ひろば」の力 ●コーディネーター NPO法人 子育て市民活動サポートWII 代表理事 相戸 晴子さん ●事例発表 NPO法人ハートフレンド 代表理事 徳谷 幸子さん 岐阜県揖斐川町揖斐川子育て支援センター 所長 高橋 和子さん 岐阜県揖斐川町揖斐川子育て支援センター 係長 四井 羽須美さん NPO法人京都子育てネットワーク 理事長 藤本 明美さん	シティプラザ 大阪・2階 【包】	18～19

11月20日(日)			
時間	分科会プログラム	会場	ページ
10:00～12:00	【第6分科会】支援者に求められる視点 ～「気になる子育て家庭」ワークショップ～ ●コーディネーター 種智院大学 助教 近藤 健二さん ●ファシリテーター (大阪府親と子のあゆみはぐくむプロジェクトメンバーより) 元摂津市家庭児童相談室 白石 真知子さん 熊取町健康福祉部子ども家庭課 瀧本 美子さん 大阪府総務部IT推進課 中 俊宏さん 枚方市家庭児童相談所 八木 安理子さん 河内長野市子育て支援センター「ちよだだい」 吉川 三幸さん 河内長野市子育て支援センター「かわちながの」 吉富 裕子さん	シティプラザ 大阪・4階 【包】	20～21
	【第7分科会】大学・生協・企業が担う「ひろば」の魅力 ●コーディネーター NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長 坂本 純子さん ●事例発表 NPO法人関西子ども文化協会 代表理事 梅原 真佐子さん 大阪いずみ市民生活協同組合組織部 組織企画スタッフ 土田 進一さん NPO法人子育て応援かざぐるま 代表理事 山田 智子さん	シティプラザ 大阪・3階 【コックウオールズ】	22～23
	【第8分科会】地域子育てをデザインする行政の協働力 ●コーディネーター (社)豊川川めぐみ保育園子育て支援センター センター長 村川 早苗さん ●事例発表 岡山県社会保健福祉部子ども課 藤田 絵里さん NPO法人きよね夢てらす子育て応援ここ 代表 福光 節子さん 香川県高松市市民政策部企画課 山下 洋司さん NPO法人わははネット 理事長 中橋 恵美子さん	大阪商工会議所 4階 402号会議室	24～25
12:00～13:00	昼休憩・展示見学		
時間	全体会プログラム	会場	ページ
13:00～13:15	「ひろば」と減災 NPO法人マミーズ・ネット 理事長 中條 美奈子さん		
13:15～13:55	各分科会からの報告 各分科会のコーディネーター		
14:00～15:00	パネルディスカッション「ひろば10年 ええ明日つくる」 ●コーディネーター 大阪市立大学 教授 山崎 文治さん ●助言者 練馬区立大泉子ども家庭支援センター 所長 新澤 拓治さん ●発言者 NPO法人ふらっとスペース会館 代表理事 岡本 聡子さん 大阪府福祉部子ども子育て支援課 課長 福山 喜彦さん	シティプラザ 大阪・2階 【包】	26～27
	●パネル展示「中越・阪神の被災者支援から学んだこと」 同志社女子大学 助教 越智 祐子さん 他 ●全体の様子 ●参加者集計・アンケート報告 ●全国セミナー・地域子育て支援拠点事業の変遷 ●実行委員会開催記録・セミナーを終えて ●実行委員会名簿		28 28 29～31 32～33 34 35

子どもきらきら・家族にこここ・地域でほっこり

シティプラザ大阪2階「旬」

当事者活動から広がり、制度として確立されるに至った「ひろば」事業の10年を振り返り、今後の可能性を考えます。

●コーディネーター

大阪市立大学 教授 山縣 文治さん

●パネリスト

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山 千鶴子さん

ROMANTIC MOTHERS STYLE 会長 新津 幸さん

北九州市立大学 准教授 恒吉 紀寿さん

●行政説明

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室 室長 黒田 秀郎さん



事例報告 当事者と専門職が思いを共有して…

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山 千鶴子さん

横浜市で、商店街の空き店舗を活用した子育て家庭の交流の場「おやこの広場びーのびー」を立ち上げたのは、平成12年。その後、市のひろば事業を受託することになるのですが、公費が投入されることに、うれしさと同時に恐さも感じました。行政から指導を受ける立場になり、自分たちの自発的活動に制限が出てくるのではないかと、有資格者でない私たちNPO・市民団体が運営することの基礎がまだできていないのではないかと、全国の見知らぬ多くの団体が事業を展開することを考えると同じような理念で実施できるのか不安もあったのです。



これからどうなるんだろう…と思った時に、「ネットワーク作り」と「研修」が大切だと思いました。

私たちが居場所作りを始めた頃、カナダの事例をたくさん学び、海外には乳幼児子育て家庭を支援する仕組みがあることを知りました。しかし、日本ではまだその仕組みは浅く、専門性も確立しきれていません。これから、その新しい専門性をどうやっていくか、そして、当事者と専門職が互いに思いを共有できるネットワークをどう広げていくかが、今後の課題だと感じています。

事例報告 若いママが運営できるようサポート

ROMANTIC MOTHERS STYLE 会長 新津 幸さん

山梨県で、10代・20代の若いママを対象としたママサークル「ROMANTIC MOTHERS STYLE(ロマンティック・

マザーズ・スタイル=通称ロマ・スタ)」を運営しています。

10代で結婚・出産し、金髪でミニスカートをはいて子育てしていた私は、ほかのお母さんたちの輪に入ることができませんでした。子育てがどんどん独立する中で、初めて同世代のママ友ができた時、子育てがすごく楽しくなりました。

そういうお母さんも多いんじゃないかと思って始めました。私たちは、たまたま「若いママ」でしたが、「ふたごのママ」「高齢のママ」のサークルがあってもいいと思います。

実は私はもう代表は引退しています。30代になったので、引退したんです。「当事者でつくるサークル」を掲げながら、当事者でなくなった私が残るのはおかしい。自分が立ち上げた時の思いとして「何が必要かは、ママたちが一番わかっている」という気持ちがあったので、ママたちが中心であるというスタイルを崩したくないんです。今は若いお母さんたちが自分たちの力で運営できるよう、サポートやアドバイスをしています。



事例報告 父親が自主的に関われる工夫を

北九州市立大学 准教授 恒吉 紀寿さん

2000年に北九州で「子育てほっとステーション・ハロハロ」を立ち上げました。子育て専門の施設が欲しいと思っていたのですが、行政に要望してもなかなか開設してもらえず、それならば居場所だけでも作れないかと、実験的に始めました。

2009年に、「地域子育て支援拠点における父親支援に関する調査研究」という全国調査をおこないました。

これまでひろばは、母親が安心できる場所を目指してきました。成果が出れば課題も出てくるもので、今度は「母親が安心できる居場所作りが、逆に性別ハードルを作っているのではないか？」という課題が出てきました。ひろばの雰囲気や話題作りも、母親中心にやってきたし、そもそも平日のみのオープンだと、父親は行きたくても行けません。

今後は、いろいろな人を呼び込むためのしつけ作りが必要です。また、ひろばに来た人がサークルを作るなど、当事者による自主的な活動につなげたり、当事者が運営に参画できるように育てていくことも大切だと思います。



パネルディスカッション



山縣 子育て支援拠点には、ひろば型やセンター型などがありますが、それらと同じ拠点事業である意味をどう捉えるか、まず厚生労働省の黒田さんにお聞きします。

黒田 センター型は、保育所の機能を地域に開放するところからスタートしており、専門的な支援がキーワードになります。ひろばは、より利用者に近いところにウエイトを置きます。子育て家庭が身近に相談できる場所、というのが、共通のコンセプトです。



ひろばはまず、当事者による実施から始まり、そこから制度化されていきました。現在、全国に5,500カ所あり、これを10,000カ所にするのが国の計画です。

親子が集まり、交流したり情報交換したりすることから始まり、もう皆さんの活動は先に進んでいます。放課後児童クラブや老人福祉施設との連携、子育てサークルの支援なども始まっており、そうした機能拡充のための助成も行っています。

現在、国が進めている「子ども・子育てビジョン」の大きな特徴は「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へ、ということ。子どもを増やすための施策ではなく、子どもを持ちたいという人たちの希望を叶えるためのものであるということです。また、

奥山 私たちは、ひろば型だけでなく、センター型の拠点の運営も受託していますが、両者の違いというより、当事者の広がりや耐えうる存在でなくてはならなかったと感じています。お母さんだけでなく、おじいちゃん・おばあちゃんやふたごのママ、外国籍のお母さんなど、支援を受ける立場の人の思いと支援する側の思いをつなぐ必要があります。恒吉 これまで、子育て支援は「寄り添う」がキーワードでした。しかし、本当の専門性は「向き合う」にあります。ではなぜ、「寄り添う」だったのか。

これまででは、子育て経験のある人、専門職の人が「向き合う」と、子育ての当事者にとっては始が広がるようなものでした。対等に向き合うには、当事者が力をつける必要があったからです。その力を、どう引き出していくかが大事です。新津 ここ何年かで、お母さんたちも変わってきました。子どもが中心の子育てでなく、自分自身も楽しんでいいんだということがわかってきたし、お母さん自身が力をつけてきて、「自分たちで何かをやりたい」という人が増えていきます。でも、すぐにできるわけじゃないですよ。だから、ベテランママや専門家の力が必要。サポートをしてくれるのが、一番いいと思います。

奥山 10年間子育て支援をやってきて、「自分たちで拠点のガイドラインを作ろう」ということで、たくさんの先生方のご指導もいただきながら「地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」」を作りました。ぜひご覧になってください。

行政説明 「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へ

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室 室長 黒田 秀郎さん

「地域づくり」にウエイトを置いているのも、特徴のひとつです。このビジョンを達成するためには、財源とともに制度的な受け皿が必要です。この受け皿となるのが「子ども・子育て新システム」で、「こども園」の創設や、これまで保育所として認可されなかった小規模の保育施設に対する財政支援など、さまざまな議論がなされています。(当日資料P19～44参照)

こども園の創設については「保育所や幼稚園はどうなるのか」といった声もありますが、保育所は保育所として、幼稚園は幼稚園として残るといった選択もあります。それらの財源の流れを一本化し、財政措置に関する二重行政を解消するとともに、公平性を保つことができるというのが、大きな特徴です。

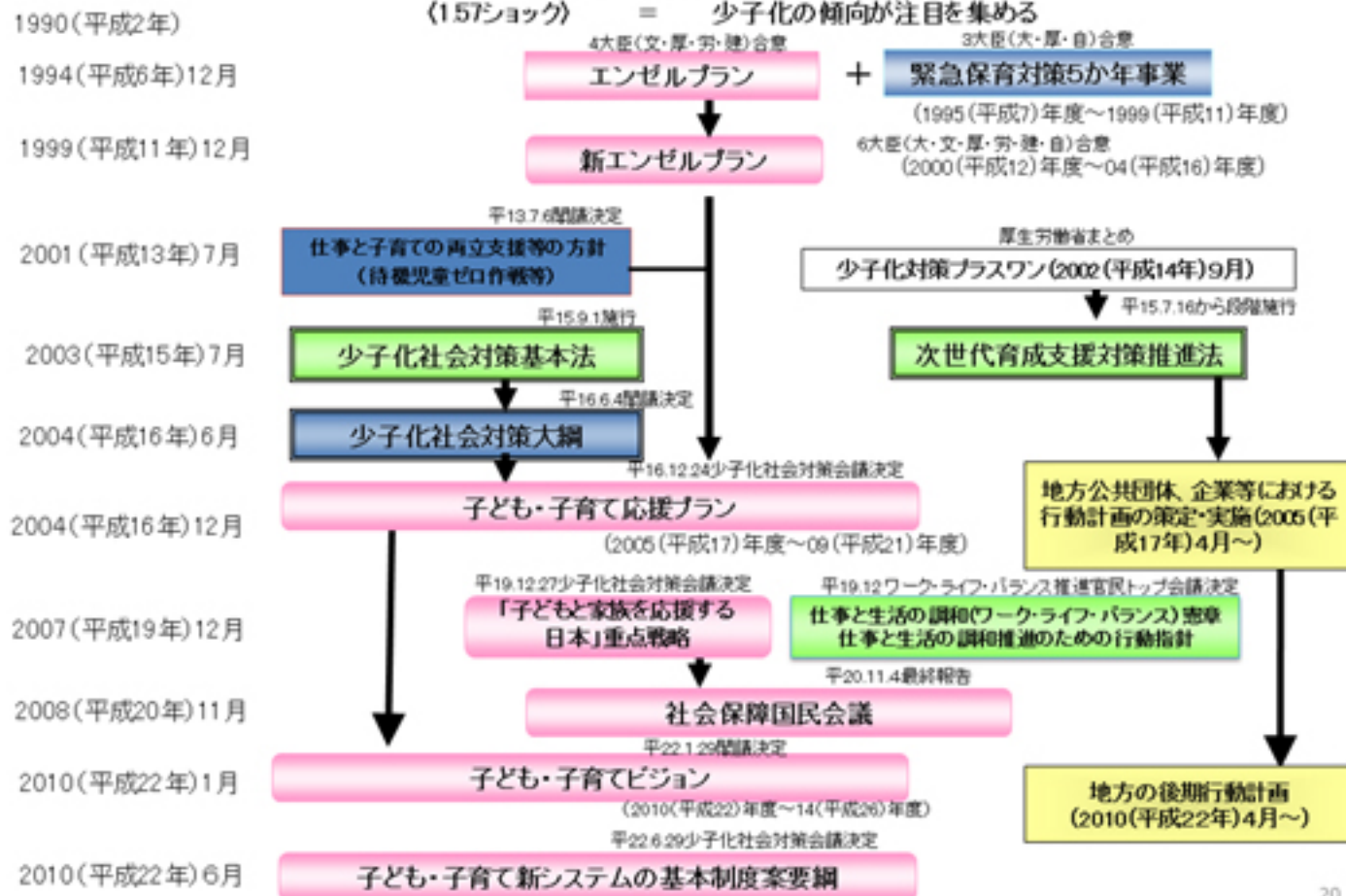
今回、10回目を迎えた本セミナーですが、これからの10年をどうしていくのか、みんなでしっかり考えていきましょう。

地域子育て支援拠点事業の概要

	ひろば型	センター型	児童館型
機能	常設のついでに広場を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取組を実施	地域の子育て支援情報の収集・提供に努め、子育て全期に関する専門的な支援を行う拠点として機能するとともに、地域支援活動を実施	民営の児童館内で一定時間、ついでの場を設け、子育て支援活動従事者による地域の子育て支援のための取組を実施
実施主体	市町村(特別区を含む) (社会福祉法人、NPO法人、民間事業者等への委託も可)		
基本事業	①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進 ②地域の子育て関連情報の提供	③子育て等に関する相談・援助の実施 ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施	
実施形態	①～④の事業を子育て親子が気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合い、相互に交流を図る常設の場を設けて実施 ・親睦交流型(別添表) 一時保育事業や放課後児童クラブなど多様な子育て支援活動とひろばと一体的に実施し、関係機関等とネットワーク化を図り、よりきめ細かな支援を実施 ・広場ひろばの活用(別添表) 常設のひろばを開設している主体が、週1～2回、1日5時間以上、広場ひろばを開設 ・地域の子育て力高まる取組の実施(別添表) ①中・高校生や大学生等のボランティアの日常的な受入・育成の実施 ②世代間や異年齢児童との交流の継続的な取組の実施 ③父親サークルの育成など父親のグループづくりを促進する継続的な取組の実施 ④公民館、地区公園、プレイパーク等の子育て親子が集まる場所に定期的に立ち寄り、必要な支援や見守り等を行う取組の実施	①～④の事業の実施に加え、地域の関係機関や子育て支援活動を行う団体等と連携して、地域に外向した地域支援活動を実施 ・地域支援活動の実施 ①公民館や公民館等地域に職員が立ち寄り、親子交流や子育てサークルへの援助等の地域支援活動を実施 ②地域支援活動の中で、よりきめ細かな支援が必要であると判断される児童への対応	①～④の事業を児童館の予約状況が未定する納付の時間を活用し、子育て中の当事者や経験者をスタッフとして活用して実施 ・地域の子育て力高まる取組の実施(別添表) ひろばにおける中・高校生や大学生等のボランティアの日常的な受入・育成の実施
従事者	子育て支援に関して意欲があり、子育てに関する知識・経験を有する者(2名以上)	保育士等(2名以上)	子育て支援に関して意欲があり、子育てに関する知識・経験を有する者(1名以上)に児童館の職員が協力して実施
実施場所	公共施設空きスペース、商店街空き店舗、民家、マンション・アパートの一室等を活用	保育所、医療施設等で実施するほか、公共施設等で実施	児童館
開設日数等	週3～4日、週5日、週6～7日 1日5時間以上	週5日以上 1日5時間以上	週3日以上 1日3時間以上

子育て支援対策の経緯

(157ショック) = 少子化の傾向が注目を集める



平成22年度 地域子育て支援拠点事業実施箇所数

(次世代育成支援対策交付金交付決定ベース)

No	自治体名	ひろば型				センター型		児童館型
		3～4日	5日	6～7日	計	小規模型	標準型	
1	北海道	0	0	0	0	0	0	0
2	青森県	0	0	0	0	0	0	0
3	岩手県	0	0	0	0	0	0	0
4	宮城県	0	0	0	0	0	0	0
5	秋田県	0	0	0	0	0	0	0
6	山形県	0	0	0	0	0	0	0
7	福島県	0	0	0	0	0	0	0
8	茨城県	0	0	0	0	0	0	0
9	栃木県	0	0	0	0	0	0	0
10	群馬県	0	0	0	0	0	0	0
11	埼玉県	0	0	0	0	0	0	0
12	千葉県	0	0	0	0	0	0	0
13	東京都	0	0	0	0	0	0	0
14	神奈川県	0	0	0	0	0	0	0
15	新潟県	0	0	0	0	0	0	0
16	富山県	0	0	0	0	0	0	0
17	石川県	0	0	0	0	0	0	0
18	福井県	0	0	0	0	0	0	0
19	山梨県	0	0	0	0	0	0	0
20	長野県	0	0	0	0	0	0	0
21	岐阜県	0	0	0	0	0	0	0
22	静岡県	0	0	0	0	0	0	0
23	愛知県	0	0	0	0	0	0	0
24	三重県	0	0	0	0	0	0	0
25	滋賀県	0	0	0	0	0	0	0
26	京都府	0	0	0	0	0	0	0
27	大阪府	0	0	0	0	0	0	0
28	兵庫県	0	0	0	0	0	0	0
29	奈良県	0	0	0	0	0	0	0
30	和歌山県	0	0	0	0	0	0	0
31	徳島県	0	0	0	0	0	0	0
32	香川県	0	0	0	0	0	0	0
33	愛媛県	0	0	0	0	0	0	0
34	高知県	0	0	0	0	0	0	0
35	福岡県	0	0	0	0	0	0	0
36	佐賀県	0	0	0	0	0	0	0
37	熊本県	0	0	0	0	0	0	0
38	大分県	0	0	0	0	0	0	0
39	鹿児島県	0	0	0	0	0	0	0
40	沖縄県	0	0	0	0	0	0	0
計		597	45	595	76	263	76	42
合計		597	45	595	76	263	76	42

ひろば型 1,965か所
センター型 3,201か所
児童館型 355か所
合計 5,521か所

子ども・子育て新システムの具体的な内容（ポイント）

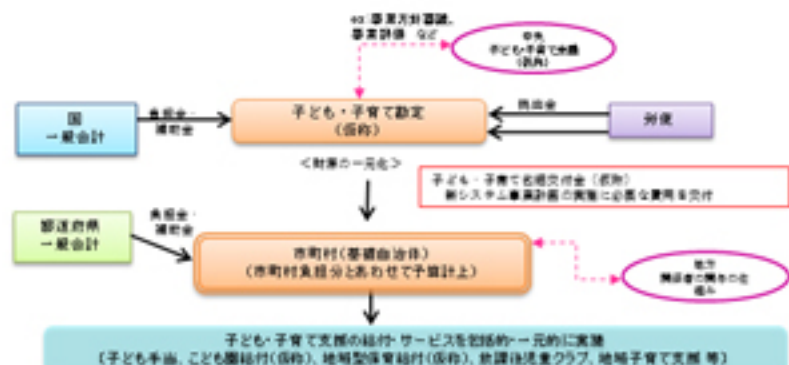
■すべての子どもへの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援

- すべての子ども・子育て家庭への支援（子ども手当、地域子育て支援など）
- 幼保一体化（こども園（仮称）の創設など）
 - ・ 給付システムの一体化（こども園（仮称）の創設）
 - ・ 施設の一体化（総合施設（仮称）の創設）

質の高い幼児期の学校教育、保育の一体的提供
 保育の量的拡大
 家庭での養育支援の充実
 を達成

■新たな一元的システムの構築（基本制度案要綱に示された新システムのイメージ）

- 基礎自治体（市町村）が実施主体
 - ・ 市町村は地域のニーズに基づき計画を策定、給付・事業を実施
 - ・ 国・都道府県は実施主体の市町村を重層的に支える
- 社会全体（国・地方・事業者・個人）による費用負担
 - ・ 国及び地方の恒久財源の確保を前提
- 政府の推進体制・財源を一元化
 - ・ 制度ごとにバラバラな政府の推進体制、財源を一元化
- 子ども・子育て会議（仮称）の設置
 - ・ 有識者、地方公共団体、労使代表を含む負担者、子育て当事者、関係団体、NPO等の子育て支援当事者等が、子育て支援の政策プロセス等に参画・関与することができる仕組みを検討



※ 基本制度案要綱に示された新システムのイメージ。国、地方及び事業者の負担のあり方、既存の財政措置との関係など費用負担のあり方、子ども・子育て包括交付金（仮称）については、今後、更に検討。

大阪府親と子のあゆみはぐくむプロジェクトより

多様な支援者による子育て支援の現在

いま
 シティプラザ大阪2階「旬」

種智院大学 助教 近藤 健二さん



大阪府と府下市町の協同で実施された「大阪府親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」で行われた「気になる子育て家庭調査」の結果から「多様な支援者による子育て支援の現在」について報告があった。

「気になる子育て家庭」調査では、子どもの有無や資格、所属機関など支援者の属性により気になり方の違いが見られた。特に所属機関による違いでは、比較的风险が低い家庭に対応し、日常の支援が求められる寄り添い型機関である保育所や幼稚園に属する支援者に比べて、比較的风险が高い家庭に対応し、問題発見が求められるスクリーニング型機関である行政福祉部門や行政保健部門に属する支援者で気になる度合いが高い結果となった。



この結果から有効な子育て支援のために支援者に求められることとして「支援者としての自己覚知」、「求められる役割と直面している状況の違いの理解」、「違いを活かしたネットワークによる支援」の三点が提起された。

ぶっちゃけ討論

子育て支援者における当事者性と専門性

シティプラザ大阪2階「旬」

当事者と専門職、当事者性と専門性。支援者としての自分を意識し、これからの支援者の役割について本音で語る「ぶっちゃけ討論」。近藤さんによる「多様な支援者による子育て支援の現在」と題する報告のあと、3人のパネリストによるトークがおこなわれました。



●パネリスト

- 種智院大学 助教 近藤 健二さん
- 長野県短期大学 講師 金山 美和子さん
- NPO法人高槻子育て支援ネットワーク ティビー 理事長 石井 智子さん



近藤 当事者と専門職、それぞれの役割を考えると、当事者性とは何か、専門性とは何かを考えたいと思います。まず、なぜ当事者性が大切かについてお聞きします。

金山 幼稚園に勤めていた頃は、教務主任

でした。今は短大で、専門職の養成に携わっています。

専門職を養成する中で、子育て支援や家族援助論といったことを教えたのは、実はここ10年ほどなんです。ということは、30歳以下の保育士でなければ、勉強していない、ということです。

私自身も、実際に親になって初めて、思っていた子育てと現実の子育ては全然違うものだというのがわかったんです。石井 私は保育士として勤めていました。その頃は、どうしても子どもの教育を考えると、お母さんたちに対して「公園にも連れて行ってあげて」「しっかり生活習慣をつけてあげてね」などと言っていました。自分が子育てするようになって初めて、「そんなにきっちりできるもんじゃない」とわかったんです。

何に困っているのか、何を必要としているのか、一番知っているのは、やっぱり当事者自身なんです。そして、問題解決していくのは当事者本人なんです。

金山 支援者は、親の代わりに子育てすることはできないし、子育ての結果に責任を負うこともできません。何かアドバイスができたとしても、それを選んで実行していくのは親だということです。

近藤 では、その当事者性を、支援者はどうやって獲得していくのでしょうか

石井 自分も親なので、つい「親の気持ちはわかってる」と思いがちですが、時代もどんどん変わってきている。わかってると思わないこと、わからなければ聞くこと。

社会の動きなども常に学んでいく姿勢が大切だと思います。金山 おもしろい事例があるのですが、前任校の大学でひろば

をやることになり、学生たちが主となって運営することになったんです。学生たちは当事者ではありませんが、ニーズを掴むのがうまく、「コーヒーを飲んでもらおう」「雑誌も置いたら？」などとアイデアを出しました。

また、利用者の方に「どうやって泣きやませるんですか?」「グープって、どうやってさせるんですか?」と質問したり。聞かれて答えるお母さんたちは、生き生きしていました。

当事者も専門職も、それまでの経験や自分の価値観に固執せず、その人の立場に立って何が必要か推察することが大切だと思います。

近藤 それでは、当事者は当事者性を持っていると言えるのかを考えてみたいと思います。

石井 当事者が、自分の問題をきちんと把握していない時もあるのではないのでしょうか。

金山 自分の子育ての経験にこだわって、相手に寄り添うことをしないのであれば、当事者であっても当事者性を持っているとは言えないと思います。

近藤 当事者のニーズ、当事者が意識していないニーズもしっかり把握し、それを社会の課題として捉えていくのが、当事者性である…ということでしょうか。

それでは、専門性とは何でしょうか?

金山 これまで、子育て支援の専門性が、保育の専門性と混同されていました。その二つのどこが同じで、どこが違うのか、まだ検証されていません。これからは子育て支援の新しい専門性を確立することが必要だと思います。

石井 専門職でなければできないこともたくさんある。自分たちができないことがあれば、それを補ってくれる人に、つないでいくことも大切だと思っています。

近藤 当事者性や、各分野の専門性も含んだ、子育て支援の新しい専門性を獲得していくことが、いま求められていると言えるのかもしれません。

第1分科会 地域子育て支援拠点事業 はじめの一步

シティプラザ大阪・2階「楽」 参加者96名

ガイドラインを基に地域子育て支援拠点事業についての基礎やスタッフの役割を確認し、その学びをグループワーク・ロールプレイで体感しました。

●コーディネーター

日本福祉大学 教授 渡辺 順一郎さん

●講師

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山 千鶴子さん

●ファシリテーター (NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 研修部会より)

NPO法人子ども達の環境を考える・ひろせん 代表理事 赤迫順代さん

地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 福岡市城南区子どもプラザ 代表 井上 みゆきさん

NPO法人子どもNPO和歌山県センター 理事長 岡本 瑞子さん

NPO法人子育てを楽しむ会 理事長/京都きっすプロジェクト 代表 迫 きよみさん

NPO法人子育て談話室 理事長 柴田 恒美さん

NPO法人やまがた育児サークルランド 代表/NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長 野口 比呂美さん

あまがさきキッズサポーターズわいわいステーション 代表 濱田 英世さん

NPO法人子育て支援ネットワークとくしま 理事長 松崎 美穂子さん

NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田 妙子さん

NPO法人くすくす 理事長 安田 典子さん



ざるをえないという、社会における地位・立場が見えてくる。子育て支援の現場を利用する母親たちの多くは、結婚・出産を機に一旦仕事を離れるという状況に目をむけていかないと子育て支援を利用する人たちの立場は理解しにくい。

グループワーク

8名の参加者とファシリテーター1名を1グループとして10テーブルに分かれ、「今時のお母さんが抱えている子育ての悩み・不安」「子育て以外のひとりの女性としての悩み・不安」をそれぞれ付箋に書き出し、模造紙に貼っていった。その後良く似たものをグルーピングする。出された項目の一例を以下に示す。

●子育ての悩み

よく泣く、うるさい、イライラする、難しい、できない、思い通りにならない、夜泣き、笑わない、言うことをきかない、手をあげてしまう、赤ちゃん返り、イヤイヤ期、離乳食、好き嫌い、少食、食事の立ち歩き、アレルギーをもっている、卒乳について、子どもの場所、公園等安心して遊べる所が少ない、どこにいけばいいかわからない、言葉が遅い、発達が遅い、他人に指示される、小児科や保育園、幼稚園はどこがいいか、子育てにお金がかかる、子育てに自信がない、子育てについて相談する相手がない、子育てを夫が手伝わない、夫が無関心

●女性としての悩み

自分の時間がない、とりのこされている、孤独感、子どもと家事で過ぎていく、とんとんふけていく、あせり、自由がない、自分は後回し、腰痛、高齢出産、しみ・しわ・たるみ、やりたい仕事を続けていけばよかった、仕事がしたい、預けるところがない、気の合う友達がほしい、新しい土地に慣れない、ママ友とのトラブル、家事に追われる、片付けられない、なぜ家事・育児は全部女、仕事と家事の両立、姑が口出しする、親の老後の心配、同居している親とうまくいかない、夫に気を使う、夫がお金を入れてくれない、夫がお酒を飲むと暴力がある、夫の態度に腹が立つ、夫が子どもを見てくれない、夫が理解してくれない、夫のうつ、リストラ



ロールプレイ

ワークショップと同じグループで、ひとりずつ

- (1)今日は誰も知り合いが来ていない…
- (2)疲れた、もう何もしたくない…
- (3)何のために生きてるのかしら…
- (4)うちの子はどうして言うことが聞けないの…
- (5)ああ、やっぱりうちの子が一番かわいい…

のうちでどれかひとつを選び、その気持ちを無声で演じてみる。全体でも演技をしてもらい、どの観を演じているかを他のグループにも当ててもらおう。

結果、正解率が高く、私たちは現場で利用者が言葉を発さなくても、その様子は感じとっているといえる。その時、支援者として自分はどのようにしているか、他のスタッフはどんな声かけをしているか、と振り返り、わざわざ拠点にやってくる理由はどこかで何かの支援を求めているという利用者の気持ちを確認した。

まとめ

子育てを巡る環境の変化の中で地域子育て支援拠点は、同じ子育て仲間との横のつながりをつくる、子育て家庭が地域との関わりを持つきっかけをつくる、地域みんなで子育てを支える場になる役割があると、コーディネーターの渡辺さんによってまとめられた。

アンケートより抜粋

- 支援をしていく上で、見えない部分に気づいていくことが重要で大切なだと実感した。
- グループワークをすることで皆さんの意見も聞けて、良かった。もう少し他の方の仕事内容やひろばやセンターの様子も聞きたかった。
- アイスブレイクやグループワークなど、参加型で楽しめた。
- 気持ちを察して、声を掛ける勇気を持たないといけないと思った。
- グループに分かれることがワークやロールプレイをするうちに有効であると分かった。グループメンバーの自己紹介があれば良かった。
- 子育て支援の必要性など、改めて考えるきっかけになった。
- あるある!! いてはる!! と思うことも多々あり、その中で自分にできることを改めて考えるきっかけになった。
- 夫との関係・外国人の母などの支援の意見も出て、今後につなげばと思う。
- ロールプレイで演じたことを見て、日々利用するお母さんの姿と重なり、支援者としての眼をしっかりと養っていかないといけないと思った。
- もっと詳しく聞いてみたい。質問・討論など出来たら良かった。
- 支援センターのスタッフとして、支援が必要な母親の気持ちを考えるきっかけになった。ロールプレイで客観的に母親の気持ちを考えられた。



講演 地域子育て支援拠点事業 ガイドライン概要

日本福祉大学 教授 渡辺 順一郎さん



●地域子育て支援拠点の経緯

1995年、地域子育て支援センター事業(当初保育所併設)開始。一方、2000年前後からNPOの活動が活発になり、自分で子育てのひろばを作りたいという動きが出てきた。国も、2002年からつどいのひろば事業を開始し、センターとひろば、さらに2007年に再編・統合され、センター型、ひろば型、児童館に併設した児童館型がスタートして地域子育て支援拠点事業が成立。2008年には、児童館や保育所と同じ児童福祉法の中の第2種社会福祉事業と位置付けられ、2014年には全国で10000ヵ所まで増やす目標額が掲げられている。

●ジェンダーの視点から見る日本のお母さんの現状

農村中心だった戦前の日本社会では、男性も女性も一緒に農作業し、子どもは祖父母がみていた。人口の増加に伴い、男は外で働く、女は家で家事育児に専念するという分類が確立し1960年代専業主婦という言葉が定着。様々な国際的な報告を見ても、日本の女性は、子育ての期間には仕事を離れ

第2分科会 「ひろば」からはじめる虐待予防

大阪商工会議所・1号会議室 参加者104名

虐待予防を目指した3団体の実践事例を通して、子育て家庭の身近に存在する地域子育て支援拠点だからこそできる虐待予防のポイントを探りました。

●コーディネーター

神戸大学 教授 伊藤 篤さん

●事例発表

社会福祉法人大阪水上隣保館子ども家庭支援センター
ファミリーポートひらかた チーフ 山下 裕美さん
NPO法人女性と子育て支援グループ
pokkapoka 代表理事 渡辺 和香さん
横浜市港北区地域子育て支援拠点「どろっぶ」施設長 原 美紀さん

事例報告 安心して話ができる場所

社会福祉法人大阪水上隣保館子ども家庭支援センター
ファミリーポートひらかた チーフ
山下 裕美さん



子育てをしていると誰もが時として閉塞感・孤独感・不安を感じるのではないだろうか？ 子育て仲間を作り、共に進んで元気になるべく親子の姿をみて「ひろばの役割」を実感する。そこでひろばに

関心を持ち、一度でも来てもらえるようにいろいろなプログラムを企画してきた。しかし地域での子育て支援が増えるに伴って、イベント的なプログラムを求めて「親子でおでかけする」ことが主流になってくる。ニーズに応えるあまり、子育て支援が親子で向き合う場ではなく、支援者からサービスを受ける場になり、かえって育児力を低下させてしまっているのではないかと危機を感じた。そこで、語ることを目的とした「アラフォーママの集い」「しみじみトーク」等共有できるキーワードを用意。大勢の人が初対面にも関わらず、自我が出てきた子どもに暴言をはいてしまうなど日々の悩みやあるいは若いママには話せない自身の体調の不安が話題になった。すぐには問題解決に至らなくても、他の人の育児方法を見聞し、いろいろな価値観があることを知ること、育児の負担感が軽減されていくのだと思う。

ひろばでは「個別相談」よりも、選ばせながらの立ち話や、気になって声を掛けたことをきっかけに相談されることが圧倒的に多い。「気になる親」を見つけるのがひろばの仕事ではなく、親が安心して心の内を話し、自分の持つ力に気づく援助をすることがひろばの役割であり、それが虐待の予防につながると感じている。



事例報告 妊娠期から継続した関わりの中でできる虐待予防

NPO法人女性と子育て支援グループ
pokkapoka 代表理事
渡辺 和香さん



助産師という立場から、ひろば事業と並行し、訪問事業も行っており、訪問の中で、ひろばや他機関につないでいくべきケースに多く出会う。事例として、3例を紹介する。

①生後2ヶ月の母子訪問時にひろばを紹介。ひろばで話をすると、子供が寝ない、言う事を聞かないなどと涙を流していた。スタッフ間で彼女に対し、否定せずによく話を聞こうと共有。次第に子どもと向き合うようになり、ひろばでも他の利用者たちとつながりもできた。二人目を妊娠し、出産まで1日に2～3時間、週に何度か上の子との関係がしんどい時に保育を利用。二人目産後はひろばスタッフとして子どもと一緒に活動している。

②養育支援家庭訪問事業で訪問した10代のママ。10代のママの集まりに誘うと、実母と参加し、毎月参加してくれるようになった。その後高校に進学し、子どもは朝保育園に預けて通学している。

③訪問事業がきっかけのひろば利用のDV被害者。彼女自身も家庭で暴力を見て育ったため、夫にDVを受けても自覚がなかった。ひろばで他の人の子どもの関わりを見て、叩かなくて育児は出来ると気づいた。

以上のような事例から、早期から地域とつながる必要性を強く感じている。母子訪問・ひろばと多方面から1人の人を知ることで、大きく見守ることができる。また、助産師という専門家の立場から、妊娠中からの支援が可能になればと願っている。

事例報告 ひろばから多様な支援につなぐ役割

横浜市港北区地域子育て支援拠点「どろっぶ」施設長
原 美紀さん



開設当初の6つの機能(当日資料P75参照)の1つである相談事業。開始から7年、最近の相談内容は母自身が抱える問題など多様になってきた。その一例として、かつての自分の暴力が子どもに影響を及ぼさないか心配だと相談にきていたAさんの例。最近もひろばで子どもを叱ることが続いていた。今も暴力が続いているのでは？ひろばで、周りを気にせず子どもを叱るのは、そんな自分を止めてほしいというサインなのでは？と、スタッフ間で話し合った。そして、それは自分で悪いと分かっているが止められない、やらざるを得ないという心の葛藤のサインだとスタッフは受け止めた。それほどまでの彼女のしんどさにどう向き合えばいいのかを考え、少しの間、預かり保育とファミリーサポートを勧めた。人と関わるのが苦手なAさんは、子どものために社会や親同士付き合っていくかねば…、ひろばはその訓練のため、と利用しているし、離婚寸前のネグレクトの方が地域で浮いてしまっているという状況もある。スタッフが連携しその人・その家族の葛藤を抱えるプログラムを立てること、その人・その家庭の持つ生きづらさに寄り添っていくこと、これがひろばの役割なのではないかと思う。しかし一方でこれらすべてのことに、ひろばがずっと支援していけるわけではないし、ひろばスタッフだけで対応できるわけではない。彼女たちが今後生活していく地域の人にその役割をつないでいくことも重要だと感じている。



参加者の声

●事例発表後、6・7名のグループに分かれて「虐待予防を充実させるには？」をテーマに話し合った。「ひろばで否定せずただ話を聞く」「同じ立場で話を聞く重要性」「行政・助産師・保健師・保育士・心理士などのつながりを密にとっていく」「地域からの孤立を防ぐ」「少し子どもから目を離し休息できることも大事」などの意見が参加者からあがった。



まとめ

以上の内容や議論を整理すると、ひろばにおいて虐待を予防するためには、

- ①虐待の予防に関連すると思われるプログラムを積極的に展開していくこと
- ②ひろばの特徴である当事者性を最大限に生かし、利用者が受容されたと感じられること
- ③妊娠期を含めた最早期から家族のライフステージに応じて、行政や専門職などの人材と連携しながら切れ目なく支援すること
- ④必要に応じて一時保育等を活用して、利用者が休息できる取り組み(レスパイト支援)を展開することが必要であるとの結論を得た。



伊藤 篤さん

第3分科会 父親も集う「ひろば」づくり

シティプラザ大阪・4階 参加者97名

子育てをしているのは母親ばかりじゃない。自然に父親が集える拠点づくりのヒントを当事者の声や父親支援プログラムの実践事例、全国調査のデータなどから解き明かしました。

●コーディネーター

北九州市立大学 准教授 恒吉 紀寿さん

●事例発表

大阪市子ども青少年局子育て支援部管理課 課長 稲木 徹さん

NPO法人新座子育てネットワーク 佐野 育子さん



事例報告 実体験を通し担当課として思うこと

大阪市子ども青少年局子育て支援部管理課 課長 稲木 徹さん



大阪市の人口・就学前児童の状況を見ると(当日資料P83参照)、在宅見数は5万を越し43.7%。在宅育児をする家庭は社会の接点が見つけにくく、気分転換を図る機会が少ないために、社会からの孤立、育児不安が保育園・幼稚園を利用し働いている家庭より強い。行政として保育園・幼稚園事業に関しては、子育て支援施策として充実させてきたが、こういった在宅育児家庭に対しても充実した支援を行っていく必要がある。具体的には、身近なところで気軽に利用できる場所、地域子育て支援拠点事業の充実があげられる。

現在の大阪市の地域子育て支援拠点は96か所。自分自身父親になり、ひろばを利用した時のことを思い出すと、他の人との交流というよりも、子どもの喜ぶ顔を見てうれしかった。また、父親になって初めて育児のむずかしさ・母親のしんどさを改めて実感し、まだまだ育児は母親の仕事という意識の抜本的な改革も必要だと思う。今までの「在宅の子育て支援＝母親が対象者」といった事業から父親も積極的に参加できるような事業の組み立てを心がけたい。現在の大阪市の父親対象の事業としては、市レベルでの「子育ていろいろ相談センター」(P82参照)におけるプレパパ体験等があるが、今後はこういった事業を、市レベルから区・地域レベルへ、より身近に展開できるような仕組みを作っていきたい。

事例報告

父親支援の様々な取り組み

NPO法人新座子育てネットワーク 佐野 育子さん



新座子育てネットワークでは、「地域子育て支援センター・るーえん」にて月1回、休日に開所し、「お父さんの時間」を設定。その体験から、カナダの父親支援等を参考に2007年「お父さん応援プロジェクト」を立ち上げ、全国の自治体や

NPOに父親支援事業を提供している。拠点をお父さんの居場所にするために、父親支援の実態調査・具体的なツールづくり(父親向けリーフレット、啓発ポスター、父親支援推進ハンドブックなど)・お父さん応援プログラム・父親支援ネットワークづくり(FSH-JAPAN)を実施。お父さん応援プログラムは、同じような悩みをもつ父親が出会い、父親役割やワークライフバランスについて学べると高評価を得ている。この機会につながった父親をそのままにせず、「るーえん」でのお父さん応援プログラム実施後には、父親のグループとして「お父さん盛り上げ隊」を結成。父親主催の深しそめん大会開催や、市のイベントに参加している。父親がほかの子どもと関わることで、他の父親から子育てを学ぶ機会ができた。イベントでの父親参加が高まった。母親、父親支援だけでなく、家族支援につながっているとその効果を実感している。また数々の失敗から設定曜日の見直しや男性スタッフの必要性、インターネットを通じた情報共有、お父さんでなく主役になってもらう企画の工夫などを学び、今後は新メンバーの開拓と小学生の父親への展開などの課題に取り組んでいきたい。

参加者からの発表

父親支援を実施している団体より、その現状・思うことを発表してもらった。

●土曜日に開所していることを活用して、パパデー・パパウィークを設定して、「パパがきてもいい」と、発信し続けていくことがすぐに効果はなくても大事だと思う。パパの中でキーマンを見つけることも大事だと思う。

●父親の声として、父親が思っている子育ては、妻(母親)が思っているより頑張っているし、考えが異なる場合もある。それを妻はわかってこない。父親はお客さんではなく主体的にかかわりたい。就業体験など社会のかかわりなど、父親が関われる視点はいっぱいある。

●まずはスタッフの夫連から、2年前男性サークル「ぱびークラブ」発足。女性スタッフは干渉しないように見守っている。趣味が高じての活動が主だが、子ども運に好評。来年のフルマラソン出場をめざす。

●子どもの年齢が大きくなると卒業してしまう。それ以降の父親のつながりが気になる。市の助成で立ち上がったが、中身をどうするかで常に悩む。例えばリズムなどが盛況だった。父親が飲むこと・遊ぶことに慣れてしまうと、子ども・母親が取り残されてしまうのでそのバランスが難しい。

●地域柄、まだまだ「子育てするのは母親」の意識が高いので、父親がひろばに来るのは、敷居が高い。日曜、誰でもOKの「ティールーム」を設けたのは効果的だった。

●毎週開催するサロンの活動を会報誌に載せ、それを見た父親がそのサロンに行きたいと、参加。現在、大学生・企業などかかわりのあるところから交流の場を設けている。



まとめ

事例発表・参加者発表より、父親支援のキーポイントとして、

- ・すべての父親がグループなど集団に属したいとは思っていないこと。
 - ・父親の情報源である妻(母親)こそが行ってほしいところと、思うような父親向けメッセージを発信すること。
 - ・父親は外で遊ぶ機会を作りたい。
 - ・父親の「やりたい」気持ちの後押しをする必要があること。
 - ・父親に「楽しい」役割・母親には「しんどい」役割と分業になってしまわないように組み合わせに気を付けること。
 - ・父親には母親とちがって明確な目標や課題が必要なこと。
- といったようにコーディネーターの恒吉さんによって、まとめられた。また、こういった研修会での情報交換の必要性も確認された。



恒吉 紀寿さん



第4分科会 ソーシャルワークの視点でみる地域子育て支援

大阪商工会議所・401号会議室 参加者127名

「地域の子育て親子を地域と共に支援する」

その手掛かりをソーシャルワークに求め、先駆的・地域支援を展開してきた2団体の報告を聞き、地域を基盤としたソーシャルワークの視点から助言を得ました。

●コーディネーター

関西学院大学 准教授 橋本 真紀さん

●助言者

大阪市立大学 教授 岩間 伸之さん

●事例発表

NPO法人子育てネットくすくす 理事長 草薨 ゆくみさん

新座市立栄保育園 地域子育て支援センター一えん センター長 橋澤 敦子さん



コーディネーターより

●第4分科会では、地域子育て支援センター型・ひろば拡充型が担う地域支援について、地域で子育てを支える意味はどこにあるのか、何を視野に入れておく必要があるのかを中心に考えていくという趣旨を登壇者と会場で共有し、討議を行った。(当日資料P.89参照)



橋本 真紀さん

事例報告 子育て支援コーディネーターや専門機関との連携

NPO法人子育てネットくすくす 理事長 草薨 ゆくみさん

それぞれ特性の違う2ヵ所の子育て支援拠点の広場での活動を報告。まず、公共施設内にある「子育て広場くすくす」は、行政との協働で母子保健事業(乳幼児相談・健診)との連携や要支援家庭への取組みではお互いに情報共有している。子育て広場のプログラムの中には「障がいのある子どもたちとの交流(一緒にランチ&お散歩)」「多胎児支援」「障がいのあるママたちの集う場」「中学生と乳幼児のふれあい活動(月に1回)」など、地域の様々な資源とのつながりを活かした取組みを実践している。また、民家の広場「子夢の家」では、地域の読み聞かせのボランティアさんやダウン症の女性ボランティアさん

んがいきいきと活動。更に、父親が広場に来やすいように土曜日は男性の社会人ボランティアを配置し、パパデイやパパweek、パパ新聞やパパブログを開設し、パパが広場に足を運びやすいようなきっかけづくりにつとめている。

4年前から両広場のスタッフが地域の保育所で実施している園庭開放へ足を運ぶようになった。自分たちの広場内で自己完結するのではなく、スタッフが地域の中へ足を運ぶことで子育て家庭が地域の子育て支援の資源(サービス)を知るきっかけになっている。また、広場とのつながりのない親子や保育所の保育士の方との交流、保育所の様子もよく分かり、お互いに顔が見える関係性ができている。その他にもスクールソーシャルワーカー、子育て支援総合コーディネーターや障害児相談支援専門員、医療機関(MSW)との連携の中で支援を受け続けている家庭への支援が可能になった。それぞれの機関が連携し、お互いの役割を確認しあうことでその家庭への様々なアプローチが見えてくる。その実践こそが「地域の育つ力」へとつながっているのだと思う。

事例報告 子育て中の外国人支援事業

新座市立栄保育園 地域子育て支援センター一えん センター長 橋澤 敦子さん



る一えんでは開所した7年前より、支援の手が届きにくい「特別ニーズ」家庭にいち早く着目し、さまざまな切り口でサロンを実施するなど、きめ細やかな支援に取り組んでいる。今回は、その中から「子

育て中の外国人支援事業」開始の経緯とその展開について事例報告をした。利用者から「近所に住む外国籍の母親が子どもと引きこもっている。何とか助けたい」との相談を受けた一えんでは、外国籍の別の一えん利用者に協力を呼びかけ個別支援に取り組むとともに、外国人への子育て支援の潜在的なニーズを実感し、「子育て中の外国人支援事業」を立ち上げた。事業を構築するにあたっては、行政をはじめ地域のさまざまな資源等に協力要請し、実態把握のための調査を実施する一方、当事者性も重視し、外国籍の親たちには企画段階からの参画を促した。異国での子育てに不安を抱く外国籍の親、本来ならば「支援される側」にあるはずの親を、敢えて「支援する側」に引き寄せて役割を与えることは、彼らが自己肯定感を育み、日本での子育てに自信をつけることに非常に効果的であった。また、事業を通して行政や地域の新たな資源と繋がることで、子育て中の外国人を地域全体で支援しようとする機運も高まった。このように、一えんで実施する事業は、その当事者性の高さにも特長がある。同じ課題を抱える親同士が、真摯に向き合い、学び、やがて解決への糸口を見出そうとする過程を、私たち支援者は側面からどうサポートできるかが重要なポイントと考えている。また、子育てを通して、子どものみならず自分の人生をも豊かなものにするために何ができるのかということを経自身が考えることは、生き生きと積極的な子育て観を養うための大切な要素にもなっている。だからこそ、継続的に見守っていき、一えんが親子にとって「特別な場所」ではなく、日常生活の延長線上にあってほしいと思っている。

事例報告 地域を基盤としたソーシャルワークの視点から

大阪市立大学 教授 岩間 伸之さん



本分科会で報告された2事例は、いずれも地域における予防的アプローチと個別支援を並行して展開している地域子育て支援における先駆事例といえる。このような、「個と地域を一体的に支援する実践」は、子育て支援の領域だけでなくすべての福祉領域において必要とされる傾向にある。また、二つの実践報告からは、実践者が「子育て」支援に収まらない支援の広がりを感じていることがうかがえた。そもそも地域子育て支援の対象とされる人の生活は、領域別に成立しているのではなく、「生活」として総合的・即時的な集合体として存在する。その支援は、生活上のニーズを広く受けとめ、生活のしづらさに着目しながら、対象者が生活するその場所で展開されることが求めら

れるであろう。つまり、今後の子育て支援においては、多様な生活課題を視野に入れつつ、子育てをどのように支援するのが課題となると考えられる。このような地域を舞台に展開される支援は、一つの機関・専門職が自己完結的に展開しうるものではない。その支援体制の形成においては、個別事例に合わせた支援体制をつくることや、他の専門機関・専門職のみならず、友人・家族・近隣住民等の関与が非常に重要となる。それは予防的視点を兼ね備えた支援体制の構築といえ、支援の担い手の広がりをもたらすことになる。これらの実践を名人芸に終わらせず、他の地域の実践者や次世代に伝達することも今後の課題であり、うまくいった事例を検証し、そのエッセンスを抽出して伝えていくことが求められるであろう。「地域を基盤としたソーシャルワーク」の視点は、その手掛かりとして有用であるといえる。例えば、今回の報告事例では、「地域を基盤としたソーシャルワーク」の8つの機能の中で、特に「広範なニーズへの対応」「連携と協働」「個と地域の一体的支援」「予防的支援」の4つの機能の発揮がうかがえた。地域子育て支援拠点事業センター型、拡充型の実践の活性化を支持するためには、先駆的事例においてはなぜうまくいき、どのような効果があったのか、さらにはこのような実践が地域に根付くためには何が必要なのかについて、理論的に整理していくことが期待される。



第5分科会 地域をつくる「ひろば」の力

地域に根ざし、地域のニーズに沿った「ひろば」は、その地域づくりでも重要な場所になっているのではないが、子育て親子の利用だけにとまらない「ひろば」の可能性を探っていきました。

●コーディネーター

NPO法人 子育て市民活動サポートWill 代表理事 相戸 晴子さん

●事例発表

NPO法人ハートフレンド 代表理事 徳谷 幸子さん
 岐阜県揖斐川町揖斐川子育て支援センター 所長 高橋 和子さん
 岐阜県揖斐川町揖斐川子育て支援センター 係長 四井 羽須美さん
 NPO法人京都子育てネットワーク 理事長 藤本 明美さん



シティプラザ大阪・2階「旬」 参加者121名

事例報告 人と人がつながる街づくりを目指して



NPO法人ハートフレンド 代表理事 徳谷 幸子さん

ハートフレンドの活動は母親自身の地域活動から始まっている。子ども会の活動から、その時期が過ぎる時につながりが切れることをさみしく思い、地域に建った仮設消防所跡を拠点とできるように、連合会会が動いてくださった。その結果、「葉津子どもの家」を開所。「ハートフレンド」の活動が生まれた。連合会会長・社協会長・PTA会長・地域の様々な団体役員・校長・教頭などが、ハートフレンドのベースになり、多くのつながりが生まれた。H18年に「つどいのひろば」受託。現在、あそびの活動・大人も含めたてらこや・育児サポート・大人の居場所づくり・子育てフォーラムの開催など、地域ぐるみの子育て、新しいつながりづくりを目的に活動している。多くのつながりから絆が生まれ、それが自然な形で福祉の街を作っていけたら…ひろばを中心に支えあう関係づくりを創っていきたく思っている。

事例報告 子育て支援センターを中心とした世代間交流・地域交流



岐阜県揖斐川町揖斐川子育て支援センター 係長 四井 羽須美さん

揖斐川町子育て支援センターは、揖斐川町合併と同時に町内唯一のセンター型子育て支援センターとして始動。近所に子育て仲間がおらず、センターが仲間づくりの場になっている。利用者は、

自主活動より、提供活動に関心が高く、これを生かして地域の人々をつないでいけないかを考えた。親の活動に利用できるセンター活動の講師は、ほとんどが地域のボランティア。元センター利用者も講師で活動中。地域で親子の姿を見ることが少なくなった現状もあり、地域の人にセンターに入ってもらうことで、世代間の交流ができればと思っている。また、合併で町内が広くなり支援センターまで行くのが困難な親子のために、出前保育を行っている。11地域の公民館、幼稚園に出向き、子供を自由に遊ばせながらママのおしゃべり時間を作っている。過疎化が進む町だが、若い年代にここで子育てしてよかったと思ってもらえるような街を作りたい、地域をつないでいきたいと試行錯誤している。

事例報告 循環型の社会づくりを目指して

NPO法人京都子育てネットワーク 理事長 藤本 明美さん

京都子育てネットワークでは、グループの運営相談、グループ間の情報交換、立ち上げ支援など地域の子育てグループ(親たちが自主的に作るサークル、民生サロンなどの総称として)を支えるコンサルティング事業(トータルサポート)を行っている。私たちの大きな理念は、子育ては一方通行ではなく、常に相互作用の中で支えあっていると実感できる循環型の社会を作っていくことだ。その理念の基、お母さん同士の支え合い・育ち合いの輪を、次世代に伝えることをサポートしている。さらに、子育て経験と得意なことを活かしてサークルを助けたいと講師になったメンバーが、地域で活躍できるようコーディネートしている。また、住宅

管理協会から過疎化したタウンに親子が安心できる居場所づくりを、と委託され、サークル活動を始めたが、その参加者が、現在開設しているつどいのひろば「ま〜ぶりんぐ」のスタッフとなり、当事者からサポーターへの転換が繋がっている。



テーマ「地域との連携・ともにつくる」について

- 4つのひろばそれぞれ特徴があり、学校が近いことで、乳幼児だけでなく、児童の夜間一時預かりの依頼があったり、市営住宅でのひろばなので、地域の交流の場にもなっていたり、ひろば利用者が地域のひろばスタッフに育っていったりと地域との連携を持っている。また、ひろば開所当時、地域での子育てに否定的だった人たちに、「いろいろな支えの中で人が育つから地域も育つ」と訴え続けたことで受け入れられたと思っている。(徳谷さん)
- 子育て支援って何?と聞かれることもいまだに多く、地域の人に子育て支援を知ってもらうことに重点を置いた。子育て通信を公民館などに置いたり、自主放送でセンターの様子を知らせるようにしたところ、地域の人に関心をもつようになり、寄付も集まるようになった。(四井さん)
- 障がいやアレルギーを持った子ども・双子・発達が遅くゆっくりな子どもなど、地域のひろば・サークルに出向くにくさを感じているお母さんのための居場所づくりとして、当事者グループと医療機関の連携と共に「せらまめ@RAKUWA」を設立。障がいを持った子の親子が前置きなしで利用ができることがメリットだが、それだけでは地域の問題解決につながらない。ひろば・サークル交流会で利用者の声を聞き合い、双方が慣れ、地域に理解者を増やし、障がいがあっても気兼ねなく出かけられるようにする。そういったノーマライゼーションの地域づくりを目指している。(藤本さん)

質疑応答

- 合併した地域の場合、元の地域に固執し、うまくいかないことはないか?
 合併してからは、隔々まで歩きたいところを見つけ、地元の人と話題が共有できるよう情報収集する努力をした。全部の地域に出かけ、体と口を使って心を込めていろいろな情報を伝えた。(四井さん)

●ボランティアは有償か、無償か?

つどいのひろばは委託事業なので、人件費が含まれている。他からのボランティアは無償。子どもの活動に関しても無給。(徳谷さん)

●発達障がいの方やダウン症の方を集められる際の方法は?

広報方法は、当事者ルート(座院・利用者の選院・通所先)と行政(保健所・支援センター)との連携がある。(藤本さん)

テーマ「地域をつなぐためのコーディネート」について

- 参加者だけでなく関わってくれる団体・共催してくれる行政などにもやりがいを感じてもらえることを大事にコーディネートしている。例えば、小学生の保育体験という事業を通じ、お母さんは、わが子の人見知りがなくなったこと、小学生は褒めてもらうことの喜び、命の大切さの体感などこの事業を通じて、いろいろな世代にやりがいを感じてもらえることを大切にしたい。(徳谷さん)
- センターとつながっている地域団体として、高齢者グループ「花もも会」があり、季節に合わせて様々な行事を企画してくれる。また、主任見重委員の助けでセンターの行事が開催できたり、町の行事を支援センターに集約できるようにしたりしながら地域とのつながりを持ち、活性化につながっていけばと思っている。(高橋さん)
- 「私」が「市民力」をつけていく・ネットワークが公共へと大きくなっていくことで、「私」の子育てが「地域」の子育てへ変容していく(当日資料P112参照)。その際のコーディネートのポイントとして、親同士が話し合ったら解決できる体験を作ること、これが地域を作っていく大きな基盤になると考える。(藤本さん)

まとめ

子育て当事者からスタートした人が、やがて地域の担い手として地域づくりに関わっていく、「私」の子育てから「私たち」の子育てへと変容していく、そういった事例を聞きながら、その過程には、適切なコーディネーターが重要であると、コーディネーターの相戸さんによってまとめられた。



相戸 晴子さん

第8分科会 支援者に求められる視点～「気になる子育て家庭」ワークショップ～

シティプラザ大阪・4階「海」 参加者58名

「ちょっと気になる」子育て家庭について、ワークショップを通して利用者が求めていることを探り、立場によって異なる視点があることを共有しながら支援者として求められる視点を振り返りました。



ワークショップの狙い

支援者からみた「気になる子育て家庭」とは？

日頃の活動で感じる「気になる子育て家庭」をグループで出し合いまとめ、自分自身の感じ方の傾向や他の支援者の考え方を知る。また考え方や感じ方の背景を考えていくことで、子育て支援者に求められる視点とは何かを考える。



近藤 健二さん

グループワーク

●アイスブレイキング

できる限り多くグループ全員の共通点を見つけることを目的に(例えば女性である、朝ご飯を食べてきた)「ドーナツ自己紹介」を各テーブルで行った。

●ワークショップ

参加者8名とファシリテーター1名を1グループとし、6グループに分かれ、

- ①「気になる」と感じる子育て家庭の特徴について、1人1人できるだけ多く付箋に書き出す。
 - ②グループでその付箋を似たものを統合しながら横造紙に貼っていく。
 - ③他のグループの横造紙を見て回る。
 - ④自分自身の感じ方の傾向とその背景などの気づき、ワークショップでの気づきや感想などを話し合う。
- という手順で進めていく。

●コーディネーター

種智院大学 助教 近藤 健二さん

●ファシリテーター

【大阪府親と子のあゆみはぐくむプロジェクトメンバー】

- 元摂津市家庭児童相談室 白山 真知子さん
- 熊取町健康福祉部子ども家庭課 瀧本 美子さん
- 大阪府総務部IT推進課 中 俊宏さん
- 枚方市家庭児童相談所 八木 安理子さん
- 河内長野市子育て支援センター「ちよだだい」 吉川 三幸さん
- 河内長野市子育て支援センター「かわちながの」 吉富 裕子さん

【あがった項目の一例】

- ・子どもに手をあげる
- ・子どもをほめない
- ・ちょっとしたことで怒る
- ・親の言葉使いが悪い
- ・子どもに無関心
- ・子どもの前で家族の悪口を言う
- ・自分に否定的
- ・悩みがないと言い切る
- ・他の親と話そうとしない
- ・ママ友をつくれな
- ・子どものいいなり
- ・携帯電話に夢中
- ・子どもをまったく見ていない
- ・子どもの後をずっとついて回る
- ・顔が汚れている
- ・服がボロボロ
- ・食事を与えない
- ・生活リズムが不規則
- ・子育てに一生懸命すぎる
- ・父親の協力が無い
- ・夫婦がうまくいっていない家庭
- ・親になりきれない親
- ・笑わない母
- ・外国人の親



発表

各グループでの話し合いを全体で共有する。以下、出された意見の一例。



・自分の経験やひろばでの経験を通じて気づく事があるが、長く続けていることで気づかなくなっていくのが気づけなくなった。
・今までいろんな見方をしていたが、(支援が)押しつけにならないようにうまく距離をとっていきたい。

・それぞれの行動ばかりではなく背景を見ていく。親と子ばかりを見るのではなく家族として見ていく。出来事ばかり見るのではなくその背景には何があるのかを読み取る事が大事。→多様な視点、広い視点が支援者に必要。

・子どもの事より親の事が気になる。親があって子どもがあるので親支援から考えていかなければいけない。

・支援者の職種によって気になるところが違った。

・こんな時はこうしたらいいのでは?などアドバイスや解決策が欲しかった。



まとめ

【支援者に求められる視点とは?】

支援者が思っている「気になる子育て家庭」は、見方を変えると、「子育て家庭から」の「気づいて」サインで、専門的視点も大事だが子育て家庭を主体とした視点も重要である。支援者からみた客観的事実と子育て家庭の視点からみた現実(子育て家庭の認識)にずれがあることを意識し、子育て家庭にとっての現実を大事に、まずは子育て家庭の見ているところに立って支援を始めよう、とコーディネーター近藤さんによってまとめられた。



アンケートより抜粋

・いろいろな方に意見や方法を伺うことができた。本当に話し合いたいのは現実に現場で起きている1つ1つの問題点や困り事をこのような機会でもディスカッションすることは?と改めて実感した。

・それぞれのグループメンバーも配慮して頂いたのが全国各地の方と話す機会がもてたのはよかった。作業に追われて意見交換があつたという間だったのが残念だった。

・ひろば経験の少ない私にとってもう少し具体的な支援の仕方、方法など聞いてみたかった。保護者としての意見も聞いてみたかった。

・自分の「思い込み」だけでなくいろいろな視点で話が聞けて良かった。楽しく学ぶことができた。

・様々な意見が聞け、自分の視点の偏りにも気づけて良かった。明日からの仕事にぜひ活かしたい。

・「ひろば」に関わっておられる方とお話しができて勉強になった。児童館で行っている者なので、ほかの方と少し立ち位置が違うのも良かった。

・アイスブレイクで行った自己紹介の方法は面白いと思った。是非どこかで活用したい。

・いろいろなひろば、センターの意見が聞けて、みな同じようなことで悩んでいると感じた。

・昨日の話とつながりがあり、ためになった。

・子育て家庭にとっての「現実」を見て、そこに支援していく方法、道筋が大事だと目標ができた。みなさんの真剣さが伝わってきた。

・昼食をとりながら話を深めていけたのも良かった。

・自分では思いつかないアドバイスを頂いた。



第7分科会 大学・生協・企業が担う「ひろば」の魅力

シティプラザ大阪・3階「コッツウォルズ」 参加者38名

多様な運営主体によるひろばが増える中、3つの異なる形態のひろば事例を聞きながら、子育て支援の共通認識を確認しました。

●コーディネーター

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長 坂本 純子さん

●事例発表

NPO法人関西子ども文化協会 代表理事 柳瀬 真佐子さん
大阪いずみ市民生活協同組合組織部 組織企画スタッフ 土田 進一さん
NPO法人子育て応援がぞくま 代表理事 山田 智子さん



事例報告 企業と協働する子育て支援

NPO法人関西子ども文化協会 代表理事 柳瀬 真佐子さん

京阪電鉄との共同事業「つくるところ」の最終着地点は、住民運営。そのためには、子育て支援とともに、コミュニティづくりが重要で、京阪電鉄がNPOに関心を持ったのも、子育て支援の知識・ノウハウに加え、企業ではなかなか難しいコミュニティづくりの点だ



ろう。またNPOが企業に求めるものは、理念の共感・活動資金、活動場所の提供。この双方がそろって、「つくるところ」が始まった。企業とNPOのパートナーシップのためには、お互いを理解することに限る。NPOは広報や資金調達という点で弱いことも含め、お互いの状況や立場をスタート時点からしっかりと確認すること。役割分担や、方向性をしっかり共有しておくことも大事だ。また、利用者の声を反映させた運営を心がけるのは、企業もNPOも変わらないが、アンケートなど数字的な目に見える声を求める企業に対し、NPOは活動の中から利用者の声を拾っていくことを心がけている。企業との定期的な会議においても、売上(数字)を伸ばすのではなく、コミュニティを造っていくことを大切にすると確認している。また、このような協働の中で「新しい公共」という視点は外したくない。従来は行政任せだった問題解決を、NPOももちろん企業も一緒に問題解決に取り組んでほしいと思う。そのためにも、当事者の声をしっかりと反映させ、利用者も巻き込みながら問題に向かっていきたいとも思っている。

事例報告 生協組合員のニーズから芽生えた子育て支援

大阪いずみ市民生活協同組合組織部 組織企画スタッフ 土田 進一さん

かつて生協の共同購入は、5~10人のグループで班を構成し、週に1回、商品を届けていた。同時に、班は世代を越えた情報交換の場という側面を持っていた。特に、子育て世代にとっては、重要な子育て情報を得る場になっていたが、現在では共同購入も構成人数が減り、個人別配送・店舗利用が増え、情報交換の側面が機能しなくなってきた。その現状とは逆に、組合員の声を聴くと、かつて以上に子育て情報を求めている声が多く、そのニーズから月1・2回開催の「親子・あそびのひろば」(参加費100円)を始め、その利用者から、ひろばのニーズを感じた。また子育てから離れた組合員の中で、ひろばスタッフとして関わることを望まれる方が多く、運営は30代から70代までの組合員が担っている。運営費については、ひろば参加費だけではまかなえないため、生協の組合員活動費の中に「ひろば活動費」を設け、ひろばスタッフに活動費・交通費を支給している。



2000年頃から、行政訪問活動を行い、生協の子育て支援活動の認知に努めているが、その中で、2009年に、富田林市、昨年に河内長野市でつどいのひろば事業を委託された。しかし、まだ自治体によっては、生協の理解が薄く営利団体と同等に扱われ、親子・あそびのひろば開催の場所を借りることさえ苦労しているのも現実である。

かつて生協の共同購入は、5~10人のグループで班を構成し、週に1回、商品を届けていた。同時に、班は世代を越えた情報交換の場という側面を持っていた。特に、子育て世代にとっては、重要な子育て情報を得る場になっていたが、現在では共同購入も構成人数が減り、個人別配送・店舗利用が増え、情報交換の側面が機能しなくなってきた。その現状とは逆に、組合員の声を聴くと、かつて以上に子育て情報を求めている声が多く、そのニーズから月1・2回開催の「親子・あそびのひろば」(参加費100円)を始め、その利用者から、ひろばのニーズを感じた。また子育てから離れた組合員の中で、ひろばスタッフとして関わることを望まれる方が多く、運営は30代から70代までの組合員が担っている。運営費については、ひろば参加費だけではまかなえないため、生協の組合員活動費の中に「ひろば活動費」を設け、ひろばスタッフに活動費・交通費を支給している。

2000年頃から、行政訪問活動を行い、生協の子育て支援活動の認知に努めているが、その中で、2009年に、富田林市、昨年に河内長野市でつどいのひろば事業を委託された。しかし、まだ自治体によっては、生協の理解が薄く営利団体と同等に扱われ、親子・あそびのひろば開催の場所を借りることさえ苦労しているのも現実である。

事例報告 大学内の学ぶ場としての側面を持つひろば

NPO法人子育て応援がぞくま 代表理事 山田 智子さん



代表など4名が卒業生である札幌大谷大学短期大学部子育て支援センター「んぐまーま」を2005年に開設。大学独自の取り組みとして大学側が運営資金を提供しNPOが運営している広場は、全国的にも珍しい。当初大学側でも賛否両論あったが、保育課教員の共通理解(当日資料P131)を得て、開設。学生が子育てを学ぶ場、保育士養成校での広場の意義なども明確にある。(当日資料P131・132参照)この協働の契約書は、両方で協議。毎年更新し、対等な立場で契約している。(P132)また、学生はひろばへボランティアとして参加したり、年2回行われる、利用者、スタッフ、教員、学生による情報交換会に参加することで、直接子育て当事者の声が聴ける。

この事業は大学とNPO双方の強みを持ちあっている。NPOの強みとしては特に、「必要であればすぐに動けるネットワークの軽さ」、スタッフが卒業生ということもあり「保育者(大学卒業後の進路)の可能性を発信できる」という点。大学側の強みとしては、何と言っても「信頼感・安心感」が挙げられる。これら双方の強みが波及効果をもたらしているといえる。

この事業は大学とNPO双方の強みを持ちあっている。NPOの強みとしては特に、「必要であればすぐに動けるネットワークの軽さ」、スタッフが卒業生ということもあり「保育者(大学卒業後の進路)の可能性を発信できる」という点。大学側の強みとしては、何と言っても「信頼感・安心感」が挙げられる。これら双方の強みが波及効果をもたらしているといえる。

質疑応答

●生協の行政訪問について、行政側の対応はどの役割? また、訪問の時期は?

自治体によって違うが、課長職の方が対応する場合もあるし、懇談会のような形で対応していただく場合もある。また、時期については、6月にCSRレポートができるのでそれを持って、夏くらいから訪問する。(土田さん) →実際に行政訪問を受けた自治体の印象(参加者の行政職員の印象)

ちょうど市内のつどいのひろばの数を増やそうと思っていた時に、生協さんから行政訪問。市内の大学や、障がい者施設でのひろば開催など、今までにない発想に興味を持った。

●大学を利用する際の警備の関係はどうか? またスタッフは?

大学は市街地にあり、駐車場がない。利用者さんには公共機関を使ってもらおう。が、双子など特例で、併設の幼稚園の

駐車場の利用許可証を頂いている。スタッフは2名。(学生受け入れ時などは3名)。拠点事業ではないけれど、今後の可能性も含め最初から拠点実施要項に沿って配置している。(山田さん)

●「つくるところ」のスタッフは、地域住民?

スタッフは関西子ども文化協会のスタッフ。地域住民運営、という最終着地点は明確だが、特に京阪側もいつまでの移行と明言していないし、同施設での保育園運営など地域運営にすぐに移行するのは難しい面がある。現在は、住民発信の企画を展開したり、ボランティア参加など、仕掛けを試みている。(柳瀬さん)

●生協の運営するひろばの独自性は?

スタッフに対しての研修体制や、保証面などでNPOではない強みがある。行政から組織力を生かすようなオーダーもある。また、利用する側にとっては、組合員の声を聴く、ニーズをくみとるというベースは絶対的にあり、生協がやっている安心さは感じると思う。(他コープ所属の参加者)

登壇者からのメッセージ

●自分たちだけではなしえないもの、大学だけでもなしえなかったことを作り上げてきたことを実感している。関わるみんなが育ちあうことが一番大事だと、これからもやっていきたい。(山田さん)

●生協は幅広い人とつながっているが深さという面ではまだ弱いと思っている。ひろばの立ち上げ以降しても、様々な支え・協力があつたと感謝している。(土田さん)

●今回の企業との協働は1つの事例にし過ぎない。企業だろうと、行政だろうと、協働する目的はそれぞれで、その目的をしっかりと双方確認するための話し込みが大事だと思う。(柳瀬さん)

まとめ

政府が検討中の「子ども・子育て新システム」は、多様な担い手が様々な子育て支援を供給する地域をイメージしている。事例発表のような多様なプレイヤーの子育て支援への参画は、選択肢の増加と多様化を実現するが、児童福祉の観点から共通認識すべき点や地域子育てとして大切にすべきものもある。共有を踏まえた豊かな協働によって、新たな子育て・子育て環境を創造することが求められている。とコーディネーターの坂本さんによってまとめられた。



坂本 純子さん

第8分科会 地域子育てをデザインする行政の協働力

大阪商工会議所・402号会議室 参加者63名

行政とNPOが協働でひろば開設に向けて取り組んできた2組の事例から、これからの地域子育て支援への取り組みにとって大切なことは何かを探りました。



事例報告 総社市での行政・NPOの協働

岡山県総社市保健福祉部こども課

藤田 絵里さん

NPO法人きよね夢てらす子育て応援こっこ 代表 福光 節子さん

●総社市の地域子育て支援拠点事業

(藤田さん)総社市の子育て支援業務を担当する課は3つの係に分かれており、支援センターは児童保育係、次世代の計画は子育て支援係、つどいの広場は母子保健課が担当している。現在総社市では平成14年に、合併前の清音村直営でスタートした「なかよし広場こっこ」をはじめ4か所のひろばを実施している。(当日資料P139)



藤田 絵里さん

(福光さん)「なかよし広場こっこ」は平成19年に委託に出す際に、任意団体「子育て応援こっこ」を立ち上げた。その後地域に根差した活動をしている既存のNPO法人きよね夢てらす(P141参照)に所属し、現在子育て部門として運営している。

●協働で取り組んでいる内容

(藤田さん)内容全般は当日資料P140に。今年度から乳幼児健診会場へひろばスタッフが向かい、ひろばの紹介を始めた。市で行ってきた妊婦教室・両親学級をひろばで実施することに変更。また、初めて市内の県立高校にひろばが向かい、授業の一環として、高校生と乳幼児が交流した。

(福光さん)私たちが健診に出向いたことがきっかけで遊びに来られたという方が増えてきた。最新の情報をいち早く市からいただけるのも助かっている。また妊婦さんへの情報発信として、母子手帳交付時のひろば案内配布は大きな強み。妊婦の時からひろばを利用していると出産後も利用

●コーディネーター

社会福祉法人豊川めぐみ保育園子育て支援センター
センター長 村川 早苗さん

●事例発表

岡山県総社市保健福祉部こども課 藤田 絵里さん
NPO法人きよね夢てらす子育て応援こっこ 代表 福光 節子さん
香川県高松市市民政策部企画課 山下 洋司さん
NPO法人わははネット 理事長 中橋 恵美子さん

しやすくなる。

●振り返り

(藤田さん)この10年を振り返って、虐待対応においてひろばは、一次予防になるいいパートナーだと捉えている。また、市はひろばと地域をつなぐパイプ役になること、色々な親子にあったひろばを開設していくことも市の役割と思う。

(福光さん)直営からのスタートなので行政との関係づくりはしやすかったし、市との関係が良かったら、他の機関との関わり方もスムーズにできる。乳幼児健診にスタッフが向かいひろばを紹介できたことで、赤ちゃんの利用が増えてきた。「ひろば」で気になる親子がいたら、すぐに保健師さんに連絡ができるのも強みだ。

●今後の課題

(藤田さん)今後の課題としては、ひろばとの情報交換を日々していく、お互いの役割分担を含め、方向性にブレはないか、親子にとっていいひろばになっているかを基本に、改めてお互い考えていくことだと思う。

(福光さん)親子にとってより良い方向に、という想いがブレない様、お互いの専門性を尊重しながらいい関係づくりに努めたい。



福光 節子さん

事例報告 高松市のひろば事業経緯

香川県高松市市民政策部企画課
山下 洋司さん

高松市の地域子育て支援拠点事業の実施経緯については、当日資料P144に記しており、現在は7か所、すべて委託で行っている。この事業を展開する下地ができたのは、対応する部署が明確になったという点が大

き。(P143参照)今年度より「こども未来局」へとスケールも大きくなった。

では、なぜNPOと協働するか、という点について。正直、高松市はなかなか委託に至らなかった。市民から援助の要望があっても、行政の特質上、財政部門を納得させるだけの材料がないと予算が取れず、アクションに時間がかかる。一方でNPOは市からの援助なしで実績を重ねていった。現場の様子を見に行き、この事業の必要性に気づき、そこからひろば委託を始め、現在に至っている。委託に際しては、対外的に公募し、その選考に際しては、実際現場を見て現場の職員と話をし、とにかく足を運ぶ、電話だけで済まさない、と心がけ、信頼関係を少しずつ積み上げている。

事例報告 行政の理解を得るための工夫

NPO法人わははネット 理事長
中橋 恵美子さん

NPO設立当初は地域密着型情報誌を発信していたが、双方向の情報交換・育ちあいの場の必要性を感じ、ひろばを自前で開設。行政との協働の必要性を感じ、NPOから行政にアプローチをした。行政と協働しようとする際に念頭においたのは、お互いにスピード感の違い・結果に対する責任の違いなど「言語が違う(ステージが違いすぎる)」ということ。何度も顔を合わせることはもちろん、行政を説得するには、口頭だけでなくデータ化した数字やアンケートをあげる、要望を文書化するなどの工夫が必要。行政職員に現場に来てもらう工夫、また、時には、「(このままでは)子育てサービスがなくなってしまうけれどそれでもいいの?」といった、刺激療法も必要だと思う。それでもなかなか難しい場合、ひろばは地域をつくっていくことにも貢献する施設で子育てをしている当事者の声が一番集まる所だといったアプローチをしていくのも良いと思う。実際私たちも、企業のワークライフバランス支援など、そこからニーズを見つけ事業に至っている。目に見えないものが見えてくる・アプローチできなかったところにアプローチできるようになるのがひろばの良さでもあると伝えたい。

コーディネーターとの質疑応答

●協働することの意義はどこにあるのか?

・NPOからすれば、正直なところ協働の意義はお金が付くということがとても大事。また、ひろばが公的なものと、信用されていることも協働のメリット。(福光さん)

・行政は住民により効率的にサービスが伝わることを考え

る。その基準からしても、親子にとってひろばが一番身近な情報が伝わりやすい。(藤田さん)

・地方分権が進み国の方からどんどん仕事は降りてくるが、正直市でそれだけのことをこなすことは難しい。最近は企業などと協働したほうがよいのでは?という声があるが、単に下請になってはいけないと思うと、NPOなどとの協働の方が効果的と思う。(山下さん)

●いままでの経緯で工夫してきたことは?

そもそもこの制度が出来上がったのは国の方が仕組みを作ってくれたからだに感謝している。その国の熱い想いを、参加者の中から伝えてもらいたい。(中橋さん)

→厚生労働省の参加者より

私が思う当事者性とは、「当事者のありのままを丸ごと否定せず受け止める力」。NPOと行政のいわゆる「言語が違う」という現象は、行政(もしくは行政から頼まれてやっている団体)は、その事業の枠を通して対象の方を見ている。自分の仕事に関係があれば対応するが、担当を外れると、それは担当ではないと言ってしまうし、決めたことだけやっていればいい。一方で当事者発の視点を持っている支援者の方はそうはいかない。この違いだと思う。だから枠にとらわれてはだめだと思う。行政の事業展開がうまくいくための答えはすべて現場にある。現場に足を運ぶ…これが大事だと思う。行政マンの引き継ぎも大事。(この分野は)誰に聞けばいいのか、をしっかり引き継いでいけば、協働はうまくいくと思う。

会場より質疑応答

●NPOへの委託事業費のなかに中間経費(団体運営費)は含まれるか。

含めるかどうかは市の管轄課にもよるし、その金額も、出す割合もその市によると思う。NPOが行政に対し、その費用も必要だと言える関係を築いていくことが大事だと思う。(山下さん)

まとめ

行政からNPOへ、NPOから行政へ、双方向のアプローチとその工夫・苦勞を踏ま、そのなかで大事なものは「人」。人とのつながり、お互いの信頼感、ネットワークが協働につながるキーワードだ、とコーディネーターの村川さんよりまとめられた。



村川 早苗さん

●報告者

NPO法人マミーズ・ネット 理事長 中條 美奈子さん

ふだんの活動が災害時に役立ちます

「マミーズ・ネット」は新潟県上越市にあり、2004年の中部地震・2007年の中部沖地震を経験しました。また、豪雪の被害も多いところです。



今日は、災害が起きてしまった時に役立つことをお話しできればと思います。

災害が起きた時には、スタッフのふだんの力が問われます。地震が起きた時の例ですが、ひろばに来ていた親子の中に着替えを取りに行った時、揺れが来ました。スタッフは、親子がこの場を離れていることを把握していたため、すぐに子どもに寄り添うという対応ができました。ふだんからスタッフが「ちゃんと見ている」ということが大切なのです。

また、ひろばとして地域とのつながりを持っていることも大切です。町内会や近所の事業所などとつながっていれば、助けをもらうことができます。また、たとえ備蓄があっても、それが使えない状況になる時もあります。そんな時は、物資を送ってくれる団体とつながっていると助かります。地震の際には、こちらからベビー用品を他市のひろばに送ったこともありました。



いま何に困っているのか、周囲に伝えて援助してもらったり、情報の伝わりにくい親子に情報を届けていくのも、ひろばの役割のひとつだと思っています。

災害が起こった時に誰がスタッフとして入っても困らないように、またスタッフ自身も被災している可能性があるということも考えて、災害時のマニュアルを作っておくことも大切です。

災害が起こるとひとりであることが不安になり、「こんな雪の中を…」と思うような状況でもひろばに来るお母さんたちがいます。経験するスキルを持ち、その人自身に解決する力があることを信じて対応していくことも、私たちの役割だと思っています。

全体会・パネルディスカッション

ひろば10年 ええ明日つくる

●コーディネーター

大阪市立大学 教授 山縣 文治さん

●助言者

練馬区立大泉子ども家庭支援センター 所長 新澤 拓治さん

●発言者

NPO法人ふらっとスペース金剛 代表理事 岡本 聡子さん
大阪府福祉部子ども室子育て支援課 課長 福山 喜彦さん



山縣 各分科会の報告を聞いて、心に残ったキーワードが5つありました。

ひとつは、「子育て支援の専門性・専門家とは?」。ふたつめは「当事者・当事者性をどう位置づけるのか」、これらは、今回のセミナーのテーマでもあります。

さらに「事業主体の多様化」というキーワードがあります。今ではNPOや社会福祉法人だけでなく、さまざまな団体が事業主体となって、子育て支援がおこなわれています。

そして、「ひろばから街を作る」という発想が出てきたこと。街作りの主体としてのひろば、ということです。

最後に、「行政との協働力」。協働ではなく、協働力を問うということは、つまり行政の協働力が低いと言いたいのでしょうか?



これらをふまえながら、まず新澤さんからお話ししたいと思います。

新澤 元は保育士として働いていました。保育園では早い時期に子育て支援を始めていましたが、最初は「スタッフの役割とは?」「プログラムはどうする?」「育児相談にはどう対応する?」といった話題がほとんどでした。



今回、虐待予防や父親支援、行政との協働といったキーワードが出てきて、幅が広がったな、変化し続けているんだと感じました。

福祉の仕事をしていると、困っている人を助けたり、何かをしてあげるといった構造になりやすいと思います。

そんな時、子育てに無関心で、子どもは放ったらかしでコーヒーを飲んでたお母さんが、ひろば創設1周年記念に作った文集に、「私のところに生まれてきてくれてありがとう」という文章を寄せてくれたのを見て、初めて「人が力を発揮するお手伝いできた」と思ったのです。これが、今も私の原動力になっています。

カナダの子育て支援の事例を学んだ時には、「ここまで30年かかった」と言われました。日本も、これからさらに10年、20年かけて、社会の共通理解を広げていくことが大切だと思います。

山縣 「初心忘るべからず」という言葉がありますが、その前の言葉を足すと「時々」の初心、忘るべからず、つまり最初だけでなく、その時その時の初心を忘れないように、という意味があるんです。新澤さんのお話から、その時々で初心に立ち返ることの重要性を思い出させていただきました。

では、福山さん、大阪府の担当者としての立場からお話をお願いします。

福山 大阪府というか、都道府県として何ができるのかというところ、「子育て支援をする市町村を支援する」というのが実態です。



住民の方々により近い市町村が、子育て支援の実施主体です。具体的には、「人材」「情報」「場所」の3つの面から支える役割があります。

人材としては、保育士など専門職の養成・確保や、研修などをおこなって資質向上を目指すのが都道府県の役割です。

情報の面では、国が計画している「子ども・子育て新システム」の情報を市町村へ、市町村の声を国へ届ける役割があります。

最後に場所ですが、保育所の拡充を回ったり、子育て支援のために公営住宅を活用するといったことも府の仕事です。大阪には、田和40年代に作られた「千里ニュータウン」「泉北ニュータウン」という、ふたつの大きな街があります。高齢化してきたこの街の空き住宅や店舗なども、活用することができればと思います。

山縣 現場の人たちは、都道府県にもっと強いものを求めているようにも見えますが…

福山 地域の自立を目指し、財源とともに権限も地方に移していく中で、地方自治法に規定されている「技術的助言をおこなう」というのが都道府県の立場です。

山縣 わかりました。今日は岡本さんが声をつぶしてしまわれたということで、新澤さんと福山さんに先に発言していただきました。それでは岡本さん、どうぞ。

岡本 聞き取りにくい声で失礼します。これだけ言いたい、ということだけ、言わせてもらいます。私が今ここにいるのは、私自身が子育てでしんどい思いをしたからです。今まさに子どもと一緒に心の中し



たり、子どもを犠牲にしそうな親を、あの時の私自身を、なんとか助けたい。そんな思いで、親子に関わっています。

時代も変わり、支援者に求められることが変化する中で、私たちが進化していかないといけない事があります。勉強もせなあかん。やりたいことだけやっていいわけじゃない。それでも、目の前にいる親子と向き合うことだけは、どんな時代がきても変わらない私たちの役割だと思います。

山縣 変わるべきものと、変えてはいけないものがあるということですね。

新澤 「変わる自分である」ことが大事だと思います。向き合う相手へのフィルターをなくす、と言いますか。子どもの育ちをどう支えるか、という基本は、私自身は変わらないですね。

山縣 国の計画も進んでおり、子育て支援のコーディネーターとしての役割が大切だということもわかってきました。子育て支援のこれからの10年を、しっかり考えて一緒に作っていきましょう。

交流会・その他



▶1日目におこなわれた交流会には、215人が参加しました。

▶会場には、大阪名物の串カツやたこ焼きも。

▼10回のセミナーすべてに参加した人には、こちらも大阪名物「たこ焼き器」を贈呈。



交流会



▼司会を担当してくれたのは、「ROMANTIC MOTHERS STYLE」の新津さんと中村さん。



◀第10回全国子育てひろば実践交流セミナー in おおさかの実行委員メンバー。



会場



◀メイン会場となったホテル「シティプラザ大阪」。夜にはホテル全体がライトアップされていました。

保育



◀保育を担当したのは「NPO法人えーる」の皆さん。19日は17人、20日は10人の保育をしました。

販売



◀書籍や絵本、手遊び用のおもちゃの販売もありました。

▶同志社女子大学助教授の越智 花子さんによる「中越・阪神の被災者支援から学んだこと」と題するパネル展示も。



パネル展示



情報交換コーナー

参加者集計

地域別参加	参加者数
北海道	8人
東北	15人
関東	62人
中部	95人
関西	576人 (内 大阪 451人)
中国	23人
四国	43人
九州	42人
計	864人

所属別参加	参加者数
NPO	331人
任意団体	103人
社会福祉法人	94人
学校法人(大学・研究機関含む)	39人
生協	60人
企業	14人
行政	199人
その他	24人
計	864人

日別参加	参加者数
19日参加者	580人
20日参加者	726人
第1分科会	96人
第2分科会	104人
第3分科会	97人
第4分科会	127人
第5分科会	121人
第6分科会	58人
第7分科会	38人
第8分科会	63人
その他	22人
2日間のべ人数	1306人

拠点別参加	参加者数
センター型	158人
ひろば型	490人
児童館型	10人
拠点事業なし	206人
計	864人

参加受付人数 888人
 当日キャンセル 44人
 当日参加 20人
 ★交流会参加人数 215人

アンケート報告

・地域子育て支援事業の基礎的なことから、企業、大学、行政としての子育て支援の取り組みや、父親の子育て支援など、様々な視点から学ぶことができ、これからの子育てサロン等開く際に少しでも活用できたらと思います。(20代男性、社協)

・たくさんの資料がありよかったです。参加しやすい参加費でよかった。ありがとうございました。弁当のない人の昼食スペースを確保しておいてほしかった(テラスはさむくて...) (20代女性、児童館)

・受付や案内の方々や、細やかな配慮がされていて、困ることなく移動できました。(50代女性、NPO)

・支援者初心者なので少しむずかしかった。もっと支援するためには...のような話もきけたらよかった。(30代女性、ママサロン)

・たくさんの方とふれあうことができたのしい時間でした。たくさんの学びがありはげみになりました。ありがとうございました。(30代女性、社会福祉法人)

・一つ一つがとても充実した内容であったように思いました。また、機会があれば聞いてみたいものばかりでした。(20代女性、保育園)

・行政枠の中で仕事をしている自分たちに比べ、NPOの方や自分でひろばを立ち上げられた方、団体の方の動きが自由で広がりのあるものだと感じた。行政枠の中で出来ることをしっかり見極め、専門性を生かした取り組みをしていかなければと痛感した。(50代女性、保育園)

・ひろばを運営して、次々に抱える課題にどう向き合うか、自分たちの進んでる方向は正しいのか？ 再確認し、これからの活動に参考になりました。全国にたくさんの仲間がいることがうれしいですね！(60代女性、NPO)

・受付や案内表示なども分かりやすく、大変ありがたかったです。交流会では、大阪名物を味わえたり、楽しい催しがあったりで、実行委員の方の準備のたまものと思います。ありがとうございました！爽りっぱいの研修でした。(20代女性、NPO)

・大勢の人でびっくりしました。子育て支援が強く求められていることがよくわかりました。自分の立ち位置からだけでなく、広く、いろいろな角度からの支援、そして主人公のお父さんお母さん子どもたちの思いを考えるいいきっかけをもらいました。(40代女性、子育て支援センター)

・1日目黒田さんのお話良かったです…今まで厚生労働省や役所の方の話はただ眺むだけだったのですが、今回は分かりやすく、おもしろかったです。2日目第2分科会の事例発表では、もっと具体例を出してほしかった(くわしく)。とても大変だったと思いますがみなさまお疲れ様でした。(50代女性、生協)

・こんなにたくさんの参加者があり、びっくりしました。10年間の支援の活動が整理されてわかりやすかったです。「新しい専門性」を構築しながら、これからの10年をがんばっていこう！と元気をもらいました。ありがとうございました。(40代女性、市民団体)

・日頃の自分を振り返ることができ、視点・視野が広がりました。今回の研修内容を参考に、現場でスタッフ間で意見交換をしたり、まだできていないことを、どう取り組んでいくのか、考えたいと思います。(40代女性、大学)

・時間的な制約がありましたので、発言はできませんでしたが、また少人数でのワーク等あれば参加してみたいと思います。(40代男性、子育てひろば)

・これほど父親支援が活発に行われていることに驚きとともに心強さを感じました。スタッフの方々、皆様ありがとうございました。(50代男性、その他)

・分科会がもっと時間があると、色々な話ができるかと思う。(40代女性、NPO)

・大変な準備だった事と思います。参加できて、とてもよかったです。なかなか他の方との結びつきがないので、とてもよい機会でした。私も、もっとがんばります。(40代女性、NPO)

・セミナーに参加するようになって何回でしょうか…毎回受けるものが多く、刺激になっています。日々の活動の中でこれからのことを考えると、すっきりしない自分と、まだまだ夢を描く自分と、次世代にどう伝えるかなど。活動を続けることは自分自身の日々の葛藤であることを思っています。その中で参加して、また新たなエネルギーをもらい、歩む道がみえてきました。この感動に感謝します。有意義なセミナーを開催していただき、ありがとうございました。(60代女性、社協)

・全国からセミナーに参加してこられた方の多数の事例はやっていく過程の先の話として参考になった。(40代女性、社協)

・行政の立場から見ると、気づかない点や、見えていなかった点が多々あったので、今後、今日受講したことを市に還元していこうと思います。ありがとうございました。(20代男性、行政関係者)

・地域の中での子育て支援と、アウトリーチ支援が大切であること、私たちもそういう前向きな活動をしていかなければ、予防を含めたこれからの子育てはできていきにくい。

まわりの人に理解されにくい、ということがわかりました。(50代女性、行政関係者)

・厚生労働省の話が聞けるのは地方に住んでいる私たちにはありがたいです。(40代女性、大学)

・お昼ご飯を食べながら、他の地域の方と交流ができて良かったです。大きな会場で多人数の研修、大変お疲れ様でした。ひろばの未来形を想像すること、現場におけるスタッフ(支援者)における役割、ネットワークやエンパワーメントなど、自分にできることは何かを考える研修になりました。ありがとうございました。素敵なことばをいただきました。(50代女性、NPO)

・理論だけでも実践だけでもだめで、両者がバランスよく組み合わせられていないといけないと思いますが、今回、内容もバランスよく、とても充実したセミナーでした。ありがとうございました。(30代男性、行政関係者)

・時代の流れを見据えて子育て支援のシステムも流動的にかえていかないといけないことなど、ひろば活動の今後の姿などもわかり、考えさせられた。(40代女性、生協)

・まだまだ勉強不足だと感じました。他の県でも自分たちと同じ活動をしている方がたくさんおりうれしい気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。(30代女性、社協)

・机があるともっとよかったです(小さいスペースでも良いので)。(30代女性、社協)

・10年目という節目の年に参加できたことをうれしく思います。手探りで始めた子育て支援がここまで大きくなったということや、やはり今の時代に必要な支援だということが改めて気づかされました。またこれからは変化していくと思いますが、原点を忘れず、その時代に合った子育て支援をしていきたいと思いました。(30代女性、NPO)

・新システムの子育て支援コーディネーターは市町村の責任とのこと。拠点ですらハード整備がやっとの現在、市町村にそれができるのか。都道府県に「指導」しなくてもせめて、サポートするための予算をつけてほしい(40代女性、行政関係者)

・行政がまずすべきことは「現場を見て実情を知る」ことだと何度も伝えてもらったように思います。これからもよろしくお願いたします。(30代男性、行政関係者)

・非常に学びの多い、充実したセミナーでした。またぜひ参加したいと思います。ありがとうございました。(20代女性、行政関係者)

・いろいろな情報を得た。職場に戻り活かせるものもあったので、是非一步を踏み出したい。(50代女性、行政関係者)

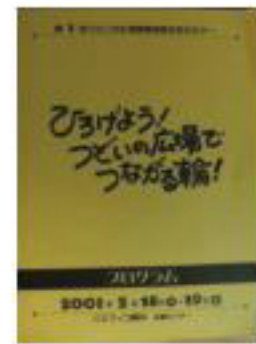
・自分の中での原点はしっかりもちつつ、時代に合わせて修正を。どう地域の中で、つながって思いを共有してつくりあげていけるのか、今回のセミナーを通して強く感じるものがありました。また前向きに進んでいきたいと思います。(50代女性、行政関係者)

・遠くまで来てよかった…と思えるセミナーでした。ともすると自分たちの中だけで完結してしまいそうになる事も、こうしていろんな立場、いろんな考えの方たちの話を聞くことで道が開けていくのですね。お世話になりました。そしておつかれさまでした！(40代女性、子育て支援グループ)

・みなさん本当にお疲れ様でした！当事者性、専門性、大きな宿題いっしょに考えていきましょう！(40代女性、NPO)



【参考資料】全国セミナー、地域子育て支援拠点事業の変遷（当日資料より抜粋）



第1回 平成14年度 開催地：神奈川県 横浜市
 開催日：2月18日・19日 会場：パシフィコ横浜
 テーマ：ひろげよう！ つどいの広場でつながる輪！

★プログラム★
 (1)行政説明 (2)基調講演「つどいの広場事業の期待と課題」
 (3)活動報告 (4)分科会 ①つどいの広場を始めるために、その概要と地域・行政との連携や広場 ②スタッフ、ボランティアの役割、学びあい ③ひろばの環境～遊び・生活・事故防止～ ④遊び・学びのプログラム ⑤ひろばでの相談・援助のあり方 (5)パネルディスカッション

・平成14年度新規国庫補助事業として「つどいの広場事業」創設
 ・全国に28カ所



第2回 平成15年度 開催地：熊本県 山鹿市
 開催日：11月4日・5日 会場：八千代座
 テーマ：かたらんね つどいの広場で夢ぞだて

★プログラム★
 (1)基調講演「社会で子どもを育てる」
 (2)行政説明 (3)シンポジウム「つどいの広場が地域を変える」
 (4)分科会 ①将来にわたって安定的な運営をするために ②つどいの広場を始めるために ③子どもの育ちを支える広場に ④利用者の主体的な活動が大切にされる広場に ⑤多様な人が集り関わった広場に ⑥地域全体がつどいの広場に (5)分科会報告

・平成15年7月「次世代育成支援対策推進法」制定



第3回 平成16年度 開催地：香川県 善通寺市
 開催日：11月27日・28日 会場：四国学院大学
 テーマ：子ども・家庭・地域の出会いと拠点 ～ひろばの働きを検証する～

★プログラム★
 (1)基調講演「地域の世代間で支える子育て」(2)シンポジウム
 (3)報告 (4)分科会 ①ひろばのプログラム ②親子への関わり方 ③こいのひろばをはじめるために ④ひろばの運営報告会 ⑤行政・地域との協働

・平成16年4月つどいの広場全国連絡協議会設立
 ・平成16年12月「子ども・子育て応援プラン」策定



第4回 平成17年度 開催地：山形県 山形市
 開催日：11月19日・20日 会場：遊学館ホール 他
 テーマ：出合い・語りあい・育ちあい～みんなが主役の子育てひろば

★プログラム★
 (1)基調講演 (2)パネルディスカッション「みんなで作ろう子育てひろば～あったらいいな！できたらいいな！の思いを形に～」 ※交流会
 (3)分科会 ①つどいの広場を始めるために ②つどいの広場の運営形態の違いによるメリット・行政との協働について ③ひろばを訪れる母親たちとの関わり ④これからのつどいの広場 ⑤特に支援を必要とする親子への対応と、専門機関とのネットワークづくり (4)全体会

・次世代育成支援行動計画前期プラン実施(平成17年度から平成21年度)
 ・つどいの広場事業は、ソフト交付金事業となる



第5回 平成18年度 開催地：埼玉県 さいたま市
 開催日：10月21日・22日 会場：ラフレさいたま
 テーマ：多様な子育てニーズに応えるつどいの広場

★プログラム★
 (1)パネルディスカッション「多様な子育てニーズに応えるつどいの広場」(2)講演・対談「お父さんの子育てとつどいの広場」 ※交流会
 (3)分科会 ①「親と子がともに育つ広場」スタッフの役割・関わり方を学ぶ ②「多様なニーズに応える」連携とネットワークの構築 ③「大学等のつどいの広場」実証と研究の現状 ④「CSRにおける地域子育て支援企業」企業・団体との取組み ⑤「つどいの広場のオープン」開設準備と初年度の課題に備える ⑥「めざそう！つどいの広場」ボランティアから拠点へ (4)全体会



第6回 平成19年度 開催地：石川県 金沢市
 開催日：11月24日・25日 会場：石川県青少年総合研修センター 他
 テーマ：～発酵から熟成へ～子育てひろば

★プログラム★ ※親子プログラム
 (1)分科会 ①新しいひろばの運営地策 ②ひろばと食育 ③ひろばと企業との協働 ④障害のある子どもたちとともに ⑤お父さん応援プロジェクト ⑥多様なプログラムとネットワーク (2)全体会(分科会報告) ※交流会
 (3)全国子育てひろば調査研究報告 (4)講演会「デンマークの子育て支援～子育てを支える民主主義の成熟～」 (5)シンポジウム「新しい地域子育てひろばの期待と課題～多様な協働を生み出そう～」

・平成19年4月 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会設立
 ・地域子育て支援拠点事業(ひろば型、センター型、児童館型)に再編



第7回 平成20年度 開催地：愛知県 名古屋市
 開催日：10月11日・12日 会場：東建ホール 他
 テーマ：みつめようひろばを「地域を！」～子どもの笑顔でまちが変わる！～

★プログラム★
 (1)行政説明「子育てひろば事業について」(2)基調講演「支え合う地域～世代をこえて・違いをこえて～」(3)シンポジウム「子育てひろばの意義と評価を考える」(4)分科会 ①子育てひろばに求められる専門性と役割 ②利用者の視点で、ひろばを見直してみよう ③虐待防止の観点からみた子育てひろばの役割と評価 ④発達に心配のある子どもと親へ「ひろばからの応援と支援」 ⑤みんなでひろばの成熟指標(アウトカム指標)をつくらう (5)分科会の報告

・地域子育て支援拠点事業、児童福祉法(第2種社会福祉事業)に位置づけられる



第8回 平成21年度 開催地：京都府 京都市
 開催日：9月5日・6日 会場：花園会館 他
 テーマ：こどもがいる暮らしを豊かにする子育てひろば ～仕事と暮らしの両方がもたらすもの～

★プログラム★
 (1)行政説明 (2)基調講演「健やかな子どもの成長のために、大人が果たすべき責任」(3)パネルディスカッション「こどもがいる暮らしを豊かにする子育てひろば」(4)分科会 ①子育てひろばの検証と、今後の方向性を考える ②発達に心配のある子どもと親の子育てひろばでの受け止め方を考える ③地域の暮らしがみえる子育てひろばをめざそう ④ワークライフバランス時代の子育て支援活動とは ⑤出張型スタッフ ⑥丹後・中丹方面、⑦南丹方面、⑧山城(北)方面、⑨山城(南)方面

・平成22年1月「子ども・子育てビジョン」閣議決定
 ・地域子育て支援拠点事業5,200カ所 (ひろば型1,500カ所)



第9回 平成22年度 開催地：北海道 札幌市
 開催日：10月30日・31日 会場：ホテルニューオータニ札幌 他
 テーマ：出会えてうれし！お！でよ、北の国のあたたかいひろばへ

★プログラム★
 (1)行政説明 (2)基調講演「地域子育て支援拠点の意義と可能性～ガイドラインにこめた思い」(3)シンポジウム「子どもと家族、スタッフ、地域、みんなが育つあたたかいひろば～北の大地からの提案」 ※交流会 (4)分科会 ①ポスターセッションフォーラム～全国の活動事例を学び合おう ②発達上の課題をかかえる子どもとその親へのめざそう ③ひろばでの一時預かりと訪問支援 ④拠点立ち上げと運営の課題解決に向けて ⑤スタッフフォーラム基本編～親子へのめざそう ⑥スタッフフォーラム中堅編～つながりの中にある困るを支えるために ⑦子どもが豊かな育ちを育むひろばの環境づくり ⑧地域が多様な人々がつどいともに育ち合うひろば

・次世代育成支援行動計画後期プランへ(平成22年度から平成26年度)
 ・平成22年6月「子ども・子育て新システム制度案要綱」策定
 ・地域子育て支援拠点事業5,521カ所



第10回 平成23年度 開催地：大阪府 大阪市
 開催日：11月19日・20日 会場：シティプラザ大阪 他
 テーマ：ひろば10年110のつどい

★プログラム★
 (1)パネルディスカッション「子どもがきらきら・家庭にここにこ・地域でほっこり」(2)報告「多様な支援者による子育て支援の現在」(3)ぶっちゃけ討論「子育て支援者における当事者性と専門性」(4)分科会 ①地域子育て支援拠点事業 はじめの一歩 ②「ひろば」からはじめる虐待予防 ③父親も集まるひろばづくり ④ソーシャルワークの視点でみる地域子育て支援 ⑤地域をつくる「ひろば」の力 ⑥支援者に求められる視点～「気になる子育て家庭」ワークショップ～ ⑦大学・生協・企業が担う「ひろば」の魅力 ⑧地域子育てをデザインする行政の協働力 (5)全体会

・平成23年7月「子ども・子育て新システム中間とりまとめ」決定

実行委員会開催記録

●第1回実行委員会 2011年4月1日(金) 15:40～17:45 大阪府新別館北館 共用会議室1	議題 実行委員長・副委員長・監事の決定 開催までのスケジュール確認 セミナー全体のイメージ作り
●第2回実行委員会 2011年5月6日(金) 13:00～18:00 大阪府新別館北館 共用会議室1	議題 セミナーテーマ決定 全体会・分科会の内容・登壇者検討
●第3回実行委員会 2011年6月3日(金) 13:00～17:00 大阪府新別館北館 職員会議室8	議題 パンフレット表紙決定 全体会タイトル・各分科会タイトル決定 登壇者決定 広報活動検討
●第4回実行委員会 2011年7月15日(金) 14:30～17:30 大阪府新別館北館 共用会議室1 シティプラザ大阪見学 13:30～14:00 大阪商工会議所見学 18:00～18:30	議題 広報先最終確認 担当実行委員の役割確認 当日役割分担検討
●第5回実行委員会 2011年10月6日(木) 14:30～17:30 大阪府新別館北館 職員会議室8	議題 参加申込状況の確認 分科会会場決定 当日の流れ・役割分担の確認 会計中間報告
●第6回実行委員会 2011年12月26日(月) 16:00～17:45 大阪府庁本館 共用第二会議室	議題 セミナーの振り返り 報告書の原稿確認

セミナーを終えて

2011年11月19・20日の大阪は、全国の人たちの子育て支援にける熱気にあふれていた2日間だったと思います。

第10回という節目の年に、全体会では当事者と当事者性の違い、専門職と専門性の違いを出し合い、「子育て支援分野の新たな専門性」という課題提起に挑戦しました。分科会では、地域子育て支援拠点事業の基本的な役割を共有したり、今後期待される虐待予防や、父親支援について意見交換。子育て地域をつくることや、ソーシャルワークの視点で支援することを事例発表をもとに学びました。子育て支援の新たな担い手について模索したり、行政の協働力を高め、民間団体も力を付けていくためにはどうしたらよいのかについても話し合われました。そして、「いざというときは、普段どおりの事しかできない」という被災された貴重な経験から、日頃から心がけ想定しておくことの大事さを確認しました。

子育て支援の実践現場に期待される役割は、時代の変化や

親子のニーズにより今後も変化していくでしょう。しかし、目の前の親子と向き合い、寄り添い続けるという初心をみなさんのおかげで私自身思い起こすことができました。へなちょこ実行委員長は、セミナー本番に体調を崩すという失態をして、多数の方にご迷惑をおかけしました。数々の行き届かなかった失礼をお詫びいたします。

一方で、沢山の方の力が合わさって開催できていることを心から実感できました。感謝の気持ちで胸がいっぱいです。このセミナーを開催するにあたり、ご協力くださったすべての方にお礼申し上げます。そしてご参加くださったみなさま、多様な立場を力にかけて、子育て支援仲間として、これからも私たちは共に学びあい、育ち合いましょう！

熱がさめやらぬ大阪より 願いをこめて。

実行委員長 岡本 聡子

実行委員名簿

実行委員長	岡本 聡子	NPO法人ふらっとスペース金剛 代表理事
副委員長	中谷 邦子	大阪つどいの広場ネットワーク 事務局長
監事	近棟 健二	種智院大学社会福祉学科 助教
監事	土田 進一	大阪いずみ市民生活協同組合組織部 組織企画スタッフ
実行委員	石井 智子	NPO法人高槻子育て支援ネットワークティピー 理事長
	大内 美江	大阪市こども青少年局子育て支援部管理課 担当係長
	坂本 純子	NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長
	高田 梨恵	大阪府福祉部子ども室子育て支援課企画グループ 主査
	鳴戸起代子	堺市子ども青少年局子ども青少年育成部子ども育成課 主幹
	橋本 真紀	関西学院大学教育学部幼児・初等教育学科 准教授
	福山 喜彦	大阪府福祉部子ども室子育て支援課 課長
	村川 早苗	社会福祉法人寝屋川めぐみ保育園・子育て支援センター センター長
	山縣 文治	大阪市立大学生活科学部 教授
	山下 裕美	社会福祉法人大阪水上隣保館ファミリーポートひらかた チーフ
	渡辺 和香	NPO法人女性と子育て支援グループ・pokkapoka 代表理事

(五十音順)

